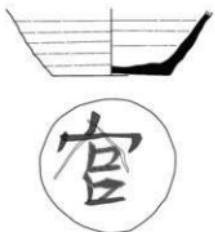


小原遺跡

(第3地点)

都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2015

水戸市教育委員会

こ は ら い せ き
小 原 遺 跡
(第3地点)

都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015

水戸市教育委員会

ごあいさつ

水戸市は那珂川の流域に位置し、八溝山系の山並みと那珂川・千波湖の豊かな自然に囲まれています。私たちの祖先もこの豊かな環境のもと古くから生活を営んできました。

小原遺跡は、市街地の南東、旧常澄村域にあたる東前の台地上に位置し、この一帯には国指定史跡「大串貝塚」をはじめ、東前原遺跡、北星敷古墳群、梶内遺跡、大串遺跡、椿山館など、縄文時代から中世に至るまでの多くの遺跡が分布しており、連続とした人々の生活の営みを垣間見ることができます。

埋蔵文化財はその性格上、一度破壊されてしまうと二度と現状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へと着実に伝えていかなければならない貴重な歴史的文化遺産です。

東前町周辺では、近年の区画整理事業に伴い、都市化が進行し、周辺に位置する遺跡の様相も大きく様変わりしております。このような都市化と文化財保護の両立は、行政としても大きな課題として懸念されるところであります。本市においては埋蔵文化財の歴史的意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づき、保護保存に努めているところです。

このたび計画された小原遺跡内における道路改良及び下水道工事につきましては、文化財保護の観点から遺跡への影響を考慮し、開発部局と事前に十分な協議を重ねてまいりましたが、今回の計画によつて遺跡の現状保存は困難であるとの結論に至り、次善の策として記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなりました。

今回の調査では、7世紀後半から9世紀後半に至るまでの堅穴建物跡や掘立柱建物跡が多数検出されるとともに、「宮」と墨書きされた土器が出土するなど、貴重な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書をかけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、今回の調査の実施に際し、多大なる御理解と御協力を賜りました地域住民の皆様と関係各位に心から御礼と感謝を申し上げます。

平成27年3月

水戸市教育委員会教育長 本多 清峰

例　　言

1. 本書は、茨城県水戸市東前町地内に所在する小原遺跡第3地点の発掘調査報告書である。
2. 調査は、都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、水戸市教育委員会が実施した。

本多 清峰 水戸市教育委員会教育長
事務局
中里誠志郎 水戸市教育委員会事務局教育次長
飯村 博史 同文化課埋蔵文化財センター所長
米川 略敏 同文化財主事
太田有里乃 同主事（調査担当者）
丸山優香里 同埋蔵文化財専門員
鈴木 学 同埋蔵文化財専門員
安達 司 同埋蔵文化財専門員
3. 水戸市から発掘調査業務委託を受けて有限会社毛野考古学研究所茨城支所は水戸市教育委員会の指示のもと発掘調査の支援業務を実施した。支援者は土生朗治・宮本久子である。
4. 調査期間は、平成27年1月26日～平成27年2月28日、整理期間は、平成27年3月1日～平成27年3月31日で、調査面積は621.25m²である。
5. 調査・整理担当者、執筆分担は以下の通りである。

【発掘調査】 太田有里乃（水戸市教育委員会）、土生朗治（（有）毛野考古学研究所）
【整理作業】 太田有里乃、土生朗治・賀来孝代（（有）毛野考古学研究所）
【執筆分担】 I・II章：太田有里乃・染井千佳（お茶の水女子大学歴史資料館アカデミックアシスタント）、III～V章：土生朗治
6. 本書に関わる資料は水戸市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の方々・諸機関からご指導・ご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。

【個人】 佐々木義則、赤井博之
【機関】 茨城県教育庁文化課
8. 本書の作成にあたっては、高橋真弓、鬼山由子、仙波菜津美、根本正子、石山亜希子、大滝千晶、成田恵美の協力を得た。
9. 発掘調査参加者は以下の通りである。

市毛祐一、小山義則、川亦洋子、佐久間弘美、佐久間恵子、鈴木とし江、高安幸且、中井川肇、高田幸江

凡　例

1. 本書で使用した地図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図、水戸市発行2千5百分の1都市計画図である。

2. 出土遺物の注記で使用した遺構の略号は以下の通りである。

SI : 竪穴建物跡 SB : 挖立柱建物跡 SK : 土坑 P : ピット SX : 不明遺構 K : 搅乱

3. 実測図で使用した縮尺は以下の通りである。

竪穴建物跡・土坑・ピット・不明遺構 : 1 / 60 カマド : 1 / 30 全体図 : 1 / 200

4. 遺構一覧表・遺物観察表の表記は()内数値が計測推定値を、〔 〕内数値は残存値を表す。

5. 色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

6. 遺構図で使用したアミカケは、次の通りである。 粘土範囲  烧土範囲 

本文目次

ごあいさつ

例言・凡例

本文目次

I	調査に至る経緯と調査の経過	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
II	遺跡の位置と環境	3
1	遺跡の位置	3
2	地理的環境	3
3	歴史的環境	4
4	小原遺跡における既往の調査	7
III	調査の方法と基本層序	9
1	調査の方法	9
2	基本層序	9
IV	遺構と遺物	11
1	堅穴建物跡	11
2	掘立柱建物跡	35
3	その他の遺構	38
V	総括	40

挿図目次

第1図 小原遺跡と周辺の遺跡	2	第12図 2号堅穴建物跡出土遺物(2)	19
第2図 小原遺跡調査地区位置図	3	第13図 3号堅穴建物跡	21
第3図 基本層序	9	第14図 3号堅穴建物跡カマド	22
第4図 小原遺跡全体図	10	第15図 3号堅穴建物跡出土遺物	22
第5図 1号堅穴建物跡	12	第16図 4号堅穴建物跡	24
第6図 1号堅穴建物跡カマド	13	第17図 4号堅穴建物跡出土遺物	25
第7図 1号堅穴建物跡掘り方	14	第18図 5号堅穴建物跡	27
第8図 1号堅穴建物跡出土遺物(1)	14	第19図 5号堅穴建物跡掘り方	27
第9図 1号堅穴建物跡出土遺物(2)	15	第20図 5号堅穴建物跡カマド	28
第10図 2号堅穴建物跡	17	第21図 5号堅穴建物跡出土遺物	29
第11図 2号堅穴建物跡出土遺物(1)	18	第22図 6号堅穴建物跡	31

第23図	6号竪穴建物跡出土遺物	31	第32図	2号掘立柱建物跡出土遺物	37
第24図	7号竪穴建物跡出土遺物	32	第33図	1号不明遺構	38
第25図	7号竪穴建物跡	33	第34図	1号不明遺構出土遺物	39
第26図	8号竪穴建物跡	34	第35図	遺構外出土遺物	39
第27図	8号竪穴建物跡出土遺物	34	第36図	善光寺2B窯跡出土遺物	40
第28図	9号竪穴建物跡	35	第37図	カマド両脇の壁柱穴と組み合う4本柱 主柱穴構造の竪穴建物例	41
第29図	9号竪穴建物跡出土遺物	35	第38図	草堂の図	42
第30図	1号掘立柱建物跡	36			
第31図	2号掘立柱建物跡	37			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	5	第9表	7号竪穴建物跡出土遺物観察表	32
第2表	小原遺跡における既往の調査一覧	7	第10表	8号竪穴建物跡出土遺物観察表	34
第3表	1号竪穴建物跡出土遺物観察表	16	第11表	9号竪穴建物跡出土遺物観察表	35
第4表	2号竪穴建物跡出土遺物観察表	20	第12表	2号掘立柱建物跡出土遺物観察表	37
第5表	3号竪穴建物跡出土遺物観察表	23	第13表	1号不明遺構出土遺物観察表	39
第6表	4号竪穴建物跡出土遺物観察表	26	第14表	遺構外出土遺物観察表	39
第7表	5号竪穴建物跡出土遺物観察表	30	第15表	遺物集計表	44
第8表	6号竪穴建物跡出土遺物観察表	31			

写 真 図 版 目 次

写真図版1	調査区全景, 1号竪穴建物跡		写真図版7	2号竪穴建物跡出土遺物	39-43
写真図版2	1号竪穴建物跡, 2号竪穴建物跡, 3号竪穴建物跡			3号竪穴建物跡出土遺物	44-49
写真図版3	4号竪穴建物跡, 5号竪穴建物跡, 6号竪穴建物跡		写真図版8	4号竪穴建物跡出土遺物	56-58
写真図版4	7号竪穴建物跡, 8号竪穴建物跡, 9号竪穴建物跡, 1号掘立柱建物跡, 2号掘立柱建物跡, 1号不明遺構			5号竪穴建物跡出土遺物	59-72
写真図版5	1号竪穴建物跡出土遺物	1-21	写真図版9	5・6・7・8・9号竪穴建物跡出土遺物	
写真図版6	2号竪穴建物跡出土遺物	22-38		73-81	
				2号掘立柱建物跡出土遺物	82
				1号不明遺構出土遺物	83-86
				遺構外出土遺物	87-91

I 調査に至る経緯と調査の経過

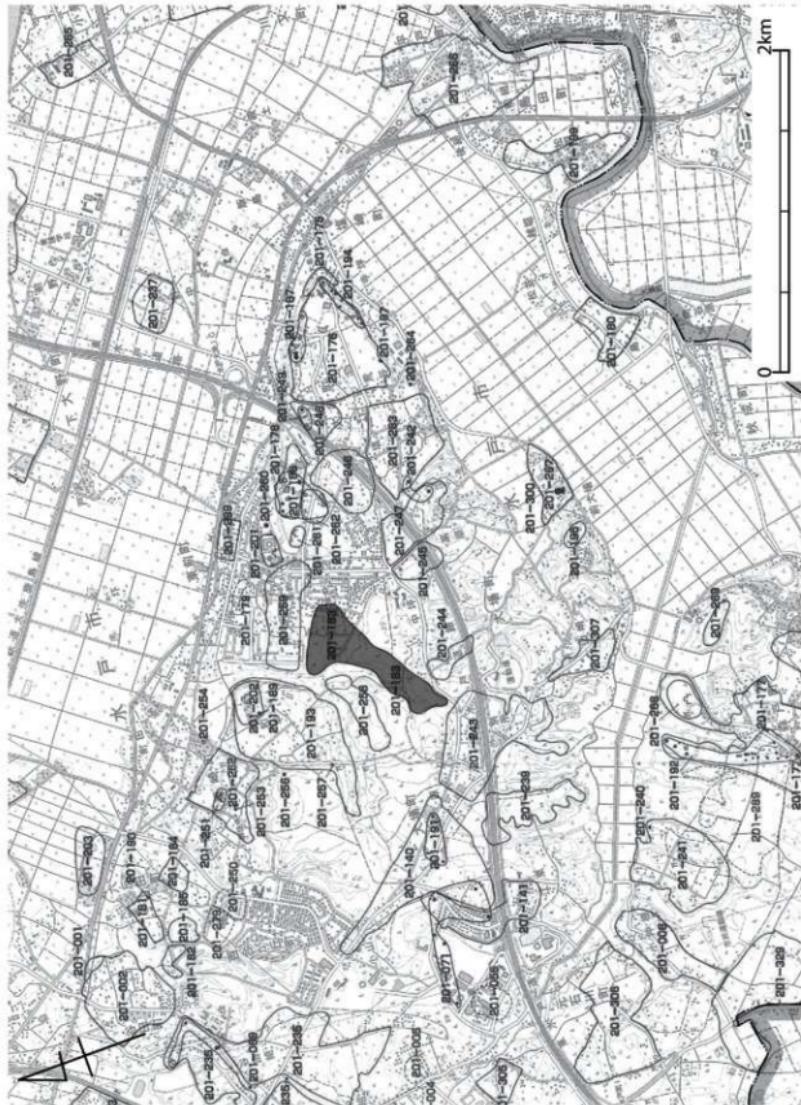
1 調査に至る経緯

平成 25 年 10 月 29 日付けで水戸市長高橋 靖（東前開発事務所扱）から、水戸市教育委員会（以下、市教委）教育長あて、埋蔵文化財の取扱いについて照会文書が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地「小原遺跡」内に該当しており、工事着手の 60 日前までに文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく通知を茨城県教育委員会教育庁あて提出する必要があること、通知提出後に県教育委員会教育長から埋蔵文化財の取扱いについて通知があること、遺跡の発掘調査や現状保存を必要とする場合には、原因者の協力をお願いする旨回答した（平成 26 年 6 月 28 日付け教理第 1106 号）。

その後、平成 26 年 6 月 13 日・19 日に開発対象地内において試掘・確認調査を実施したところ、埋蔵文化財が確認された。この調査結果に基づき原因者である東前開発事務所と保存について協議を重ねたが、計画変更等は困難であることから、東前開発事務所から提出のあった文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく通知に、記録保存を目的とした本発掘調査の実施が相当である旨、意見書を付して茨城県教育委員会（以下、県教委）教育長あて進達した。この通知に対し、県教委教育長から工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構が確認された場合には、その保存について別途協議する旨の指示・勧告があった（平成 26 年 7 月 5 日付け文第 815 号）。市教委は工事対象地 10,000 m²のうち、埋蔵文化財が確認された面積 621.25 m²を調査対象地とし、平成 27 年 1 月 26 日から 2 月 27 日の期間に本発掘調査を実施した。

2 調査の経過

平成 27 年 1 月 26 日小原遺跡第 3 地点表土除去作業を開始する。1 月 28 日に遺構の確認作業を開始し、大型の 1 号竪穴建物跡以下竪穴建物跡 9 軒と掘立柱建物跡 2 棟、不明遺構 1 基を確認する。29 日には 1・2 号竪穴建物跡の掘り込み作業開始する。2 月 7 日に 5 号竪穴建物跡、10 日に 9 号竪穴建物跡の掘り込みを開始する。20 日には、掘立柱建物跡の掘り込みも終了し、竪穴建物跡の床下調査を行う。23 日に空撮による全景写真を撮影する。その後ピットや土坑の調査もがないことを確認し、現地調査を完了する。



第1図 小原遺跡と周辺の遺跡

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

水戸市は茨城県中央部のやや東よりに位置しており、北はひたちなか市と那珂市、西は城里町と笠間市、南は茨城町、東は大洗町に接している。

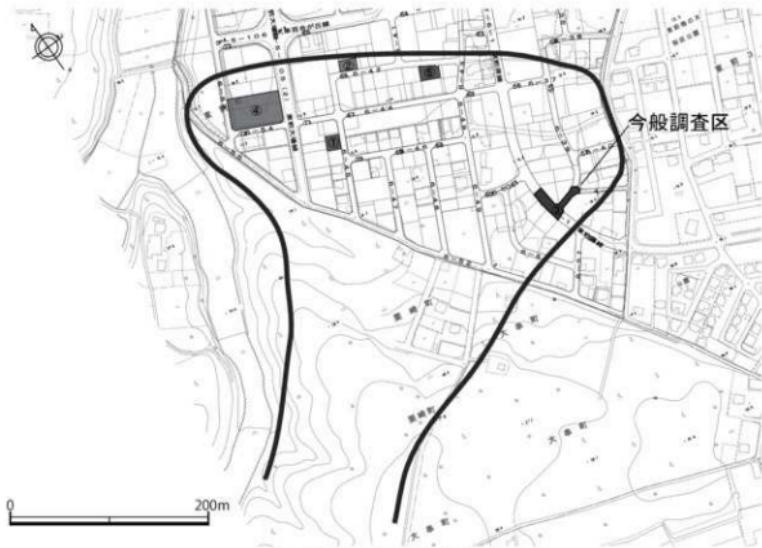
小原遺跡は水戸市東部の東前町に所在する。東前町は大洗・鹿島方面に向かう国道51号線近くに東前団地として宅地開発が行われている地域を含む。

小原遺跡は東前団地南西部の台地上にあり、宅地化した部分と未着手の畠地・山林が残る場所である（第1図）。地元の熱心な収集家により、付近からは、古墳時代前期の土師器や奈良・平安時代の須恵器、土師器等が採集されており、奈良・平安時代の須恵器には中空円面鏡も確認されている。

2 地理的環境

今般対象となった第3地点は、東経140度31分37秒、北緯36度20分14秒に位置する茨城県水戸市東前町1061, 1062-1, 1064, 1065番地地内に所在する（第2図）。

水戸市は、関東平野の北東部を占める常総台地、なかでも茨城台地北部に位置している。太平洋に近いが海岸には面していない。市域北部は八溝山地を横切る那珂川下流にのぞみ、茨城台地の一部である



水戸台地の西北端には、八溝山地外縁の丘陵がつづく。

周辺地形 周囲の地形に目を移すと、北部の阿武隈山地に属する多賀山地は、太平洋岸の海岸段丘からなる多賀海岸平野を形成し、阿武隈山地から分かれる久慈山地と八溝山地の間には、久慈川の浸食谷がつくられている。さらに八溝山地に属する鶴足山塊と氣波山塊の間には、笠間市の谷盆地がある。

一方、水戸市の南部には常総平野が展開し、関東平野の一部をなす。このように南部の平野と西部の笠間市の谷盆地、北部の久慈川の谷、多賀海岸平野などを結ぶ基点として水戸市を地形的に位置づけることができる。こういった点から歴史的にみて、水戸市域は水陸交通の拠点であるといえる。

地形区分 水戸市の地形は、北部から東部に流れる那珂川を中心に構成される沖積層の低地、茨城台地の北東部をなす水戸台地（上市台地・緑岡台地など）と呼ばれる沖積層の台地、鶴足山塊の外縁部をなす第三紀の丘陵の三つに区分される。洪積層台地のうち、那珂川と涸沼川との合流点に向かって突き出た台地はとくに吉田台地と呼称される。

当該遺跡は、吉田台地の先端に近い那珂川に面した標高 20 m 前後の台地上に立地する。付近には先土器時代から近世にかけて多くの遺跡が立地するが、近年ニュータウン建設などをはじめとした宅地化が急速に進んでおり、往時の景観は次第に失われつつある。

3 歴史的環境

小原遺跡が立地する吉田台地、特にその東端部には、先土器時代から近世に至るまでの多数の遺跡が形成されている。ここでは、小原遺跡の周辺に分布する遺跡群の既往の調査成果を中心に歴史的環境を概観する。

先土器時代～縄文時代草創期 小原遺跡周辺における人類の土地利用は先土器時代にまで遡る。当該期の資料は、石川川を挟んだ南側の台地に立地する森戸古墳群と元石川大谷原遺跡からの出土例が知られている。森戸古墳群第 12 号墳（大六天古墳）の発掘調査において、チャートやメノウから構成される石器群の出土が報告されている。石器群の大半は墳丘盛土・周溝覆土内からの出土品であるが、剥片 1 点が周溝底面のローム層中から出土している（伊東 1976）。森戸古墳群の西側に展開する元石川大谷原遺跡では古墳時代後期の竪穴建物跡からガラス質黒色安山岩製の剥片が 1 点出土している（川口・色川・渥美・片平 2008）。これらの資料のほか、周知の埋蔵文化財包蔵地内の採集ではないが、百合が丘町・下入野町地内等において、ガラス質黒色ディサイトや硬質頁岩製の神子柴型尖頭器が採集されている（川口 2005・2008）。

縄文時代 縄文時代の遺跡として著名なのは大串貝塚である。大串貝塚は『常陸国風土記』那賀郡条に記された巨人伝説とともに著名な前期貝塚であり、貝塚としては、文献に記載された世界最古のものである。一部が国の史跡に指定されているが、豊富な出土資料は、質・量とともに茨城県下における当該時期の貝塚を凌駕している（水戸市教育委員会 2010）。下畑遺跡では、加曾利 E 式・大木 8 b 式期の竪穴建物跡をはじめとする遺構群が確認されており（井上 1985），複式炉を有する竪穴建物跡が発見されるなど、中期から後期にかけての人類の営みをうかがうことができる。

弥生時代 弥生時代の人々の生活の痕跡は他の時代に比べてやや低調な傾向にあるが、薄内遺跡第 1 地点では、遺構に伴わないものの土器の器面の表裏に条痕文を施す前期末から中期初頭の土器が多数出

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
201-066	下畠遺跡	集落跡	縄文土器（中・後），石器（打製石斧，石礫，石錐，圓石，磨石，石棒，石劍），土製品（土器片鍾），土師器（古後）	
201-175	大串貝塚	貝塚	縄文土器（前・後），石製品，貝刀，骨角製品（釣針・刺突具）	国史跡
201-176	大串遺跡 官衙	古墳 集落跡	縄文土器（早・前・後），石器（有舌尖頭器・石錐・錐器，磨製石斧・蔽石・磨石），骨角製品（釣針・刺突具），貝刀，自然遺物（貝・鼈骨・魚骨），土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平），土製品（土玉・土鍬・劫鍬車），石製品（管玉・敲石・鉛石），金屬製品（鍔・刀子）	S62, S63, H6, H8, H14, H17, H19 調査
201-183	小原遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平）	本遺跡
201-185	薄内遺跡	集落跡	剝片（先土器），縄文土器（早・前・中・後），弥生土器（前・中・後），石器（石鑿未成品・石礫・剝片・磨石・敲石・台石），土師器（古・奈），土製品（劫鍬車・鍔），金屬製品（鍔・不明製品），陶器，磁器	
201-186	金山塚古墳群	古墳群	円筒埴輪，金屬製品（鐵鍔・刀子）	前方後円1 (1), 円3 (5) S26年調査
201-187	大串古墳群	古墳群	五獸鏡・銅環・直刀・铁鍔・蓋鏡・兵庫鏡・素面鐵板付軒	前方後円1, 円1 (5)
201-192	森戸古墳群	古墳群	台形椎石器？・剝片（先土器），底部穿孔蓋，円筒埴輪，形象埴輪，石製品（勾玉）	前方後円1, 方8 (1), 円15 (17)
201-193	上平遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平），墨書き土器	
201-194	長福寺古墳群	古墳群		円7
201-195	瀬沼台古墳群	古墳群		円7?
201-201	椿山船跡	城船跡		
201-242	高原古墳群	古墳群	弥生土器（後），須恵器（奈・平），瓦	円2, H3・H6・H17 調査
201-202	和平船跡	城船跡		
201-235	町付遺跡	集落跡	縄文土器（早），弥生土器（後・純），石器（磨製石斧・勾玉），土製品（劫鍬車），土師器（古前・中・奈・平），須恵器（奈・平），陶器，磁器，土師質土器	
201-244	諏訪前遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平）	
201-245	沢越遺跡	集落跡	土師器（奈・平），須恵器（奈・平），墨書き土器，円面鏡，金屬製品（劫鍬車・鍔・鍾・鍾）	
201-246	梶内遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平），墨書き土器，圓面鏡，金屬製品（劫鍬車・鍔・錢貨），陶器	
201-247	高原遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（奈・平），須恵器（奈・平），土師質土器，金屬製品（錢貨）	
201-248	北星敷遺跡	集落跡	土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平），瓦，陶器	
201-249	北星敷古墳群	古墳群	縄文土器（早・前・中），弥生土器（後），土師器（前・中），石製品（石鑿・鉛石），土製品（土玉・劫鍬車・形象），須恵器（奈・平）	円1 (2)
201-258	打越遺跡	集落跡	土師器（奈・平），須恵器（奈・平）	
201-259	東前原遺跡	集落跡	弥生土器（後），土師器（古・奈・平），須恵器（奈・平）	
201-262	大串原船跡	城船跡		
201-263	宮前遺跡	集落跡	土師器（奈・平），須恵器（奈・平）	
201-267	大畠天神山古墳	古墳	弥生土器（後），三角錐神獸頭，鐵劍，太刀	前方後円?!
201-289	元石川大谷原遺跡	集落跡	剝片（先土器），縄文土器（後），土師器（古後），須恵器（奈・平），墨書き土器，灰釉陶器，土製品（土鍾），金屬製品（鍔具・刀子・鍔・鍔？），錢貨	

土している。さらに、遺構には伴わないものの中期前葉・中期末・後期末の土器も出土しており（日沖・石丸・川口・色川・新垣・渥美 2008），当該期の遺構が周辺に展開している可能性が考えられる。後期になると水戸市域でも堅穴建物跡が検出される事例が多数確認されており、町付遺跡第1地点では後期後半の堅穴建物跡が1棟確認されている（南田・山本・土井・渥美 2009）。

古墳時代 古墳時代を迎えると，在地首長の墳墓とみられる大場天神山古墳，大串古墳群，長福寺古墳群，高原古墳群，金山塚古墳群，北屋敷古墳群，高原古墳群，潤沼台古墳群，森戸古墳群など古墳の築造活動が活発化し，その周辺に集落跡が展開する状況がうかがえる。発掘調査は行われていないが，大場天神山古墳からは波文帯三角縁神獸鏡・鉄劍・太刀が不時発見されており，前期古墳とみられる。波文帯三角縁神獸鏡は，現在のところ日本列島における舶載鏡の東限である。

森戸古墳群第12号墳（大六天古墳）からは，底部穿孔蓋や滑石製の勾玉が報告されており（伊東 1976），前・中期から形成されていた可能性が高い。また，大串古墳群の範囲内にある稻荷神社境内からは，五獣鏡・銅環・直刀・鐵繩・蓋鏡・兵庫鏡・素和鏡板付響などが出土しており，中期後半から後期にかけての副葬品である（東京国立博物館 1980）。これらの副葬品が帰属する古墳は定かではないが，前方後円墳である大串稻荷神社古墳が想定されよう。

後期になると埴輪を樹立した古墳が多数築造されるようになる。北屋敷古墳群第2号墳からは，武人埴輪をはじめ巫女埴輪や馬形埴輪など多数の形象埴輪と円筒埴輪が出土している（井上・千葉 1995）。前方後円墳である森戸古墳群第1号墳からは踏査の際に円筒埴輪，楯形埴輪，家形埴輪，馬形埴輪が埴丘上より採集されており，6世紀代の築造と考えられる。また，墳丘形態は未詳だが，第2号墳からは齒の表現がなされた人物埴輪も出土しており（吉川 1991），楯持ち埴輪であった可能性が高い。

後期から終末期にかけての古墳とみられるのは北屋敷古墳群第1号墳である。同古墳は，北関東自動車道東水戸道路の敷設に伴う発掘調査の際，埴輪を伴わず，礫床切石積みの横穴式石室を持つ直径14mの円墳であることが確認され，副葬品として直刀・刀子・鐵繩などが出土している（梶山 1993）。

次に集落遺跡の動向を見てゆこう。前期から中期前半の集落は，大串遺跡・北屋敷遺跡・薄内遺跡・町付遺跡で堅穴建物跡が多数確認されている（井上 1994，井上・金子 1996，日沖・石丸・川口・色川・新垣・渥美 2008，南田・山本・土井・渥美 2009）。中期の集落跡は北屋敷遺跡において堅穴建物跡が2棟確認されているのみで（梶山 1993），前期と比べて検出例が少ないことから遺跡の立地に変動が生じた可能性を示唆する。後期になると集落遺跡が広く展開する状況がうかがえ，小仲根遺跡・大谷原遺跡・梶内遺跡等で6世紀代の堅穴建物跡が検出されている（川口・小川・大渕 2002，川口・色川・渥美・片平 2008，樋村 1995）。特に6世紀に営まれたとみられる堅穴建物跡は7mを超える大型のものが多い特徴がある。終末期の集落遺跡は検出例が乏しく，梶内遺跡と大串遺跡第7地点で堅穴建物が数棟確認されているに留まる（樋村 1995，小川・大渕・川口・木本・渥美・閑口・株式会社京都科学 2008）。

奈良・平安時代 奈良・平安時代となり，律令制下との中央集権体制が構築されていくなか，水戸市域においても地方末端支配を目的とした郡衙及びその周辺寺院の造営が渡里町に所在する台渡里官衙遺跡群において展開し，その支配体制の中へと組み込まれていくこととなる。水戸市は市域全域が常陸国那賀郡域内にあり，小原遺跡の周辺は芳賀里（郷）に否定される（中山 1979）。小原遺跡の周辺に展

開する当該期の遺跡で注目されるのは大串遺跡である。第7地点の発掘調査の際、断面V字状を呈する大型の区画溝によって囲繞された内部に整然と並ぶ総地業の礎石建物跡3棟が確認されたほか、東柱を持ち壇地業を有する桁行6間×梁間3間の大型の掘立柱建物跡等も確認されている（小川・大渕・川口・木本・渥美・関口・株式会社京都科学 2008）。大型の掘立柱建物跡の柱抜取穴からは、多量の炭化材とともに炭化米が、区画溝からは炭化した穀稈や穀稈が出土しており、3棟の礎石建物跡が正倉、大型の掘立柱建物跡が穀屋もしくは倉の代用として建築された揚げ床の倉代であった可能性が指摘されている。このほか、「厨」銘黒書土器の出土など、官衙的色彩の強さが目立つ当該地点の遺構群は、那賀郡内に設置された正倉別院であったであろうことが指摘されている（小川・大渕・川口・木本・渥美・関口・株式会社京都科学 2008）。

大串遺跡の西側に展開する梶内遺跡は、8世紀から10世紀まで、土地利用が希薄になる時期が存在するものの、比較的長く継続する集落跡して看過することができず、「舍人」・「長」や里（郷）名を記載した「芳」銘墨書土器、9点の円面鏡が出土しており、官衙周辺集落とみられる（樋村 1995）。

中・近世 中世に武士が実権を握る時代となり、小原遺跡が所在する旧常澄村域と重なる恒富郷を支配していたのは、常陸平氏大塚氏の一流である石川氏であった（常澄村史編さん委員会編 1989）。小原遺跡周辺に位置する当該期の遺跡としては、椿山館跡、和平館跡、大串原館跡が挙げられる。いずれの城館跡も土壘の残存が報告されているが、発掘調査は行われておらず、年代については不明な点が多い（水戸市教育委員会 1999）。近世において当該時期の台地上は、水戸城下の外縁部にあたり、必ずしも前代のような求心力を有する地域であるとは言い難いが、当該時期に帰属する溝跡や土坑等は梶内遺跡や北屋敷遺跡、高原遺跡、伊豆屋敷跡等で検出されており（梶山 1993、樋村 1995、井上 1998），土地利用の痕跡を窺うことはできる。これらの遺構の大半は村落に伴うものと考えられるが、北屋敷跡第1地点から検出された第22号土坑からは、人骨とともに伊万里の花瓶・煙管・寛永通宝6枚・印籠が副葬品として出土しており、墓坑と考えられる（梶山 1993）。伊豆屋敷跡は『新編常陸國誌』等に立原伊豆守の居所を記されており、発掘調査の結果、3条の土壘と1条の溝跡が確認されている（井上 1998）。

4 小原遺跡における既往の調査

当該調査の報告書刊行時において、小原遺跡における発掘調査は計5地点において行われている（第2図・第2表）。

第2表 小原遺跡における既往の調査一覧

地点名	調査個所	調査	種別	調査原因	遺構	遺物
第1地点	東前町1049-4	H24	試	個人住宅建築	—	—
第2地点	東前町1150-3	H26	試	個人住宅建築	—	—
第3地点	東前町1056～1065	H26	試／本	土地区画整理事業	○	○
第4地点	東前原第二区画整理地73街区2・3・6	H26	試／本	個人住宅建築	○	○
第5地点	東前原第二区画整理地66街区20	H26	試	個人住宅建築	○	○

これらのうち、本調査以外で遺構・遺物が確認されたのは第4地点・第5地点である。記録保存を目的とした本発掘調査に至ったのは現時点では第4地点である。第4地点からは、6世紀、7世紀後半、8世紀、9世紀にかけての堅穴建物跡群が一部重複する状態で検出されており、本地点に先行する集落跡や同時期の集落跡が広く展開している状況がうかがえる。また、9世紀代に帰属する一部の堅穴建物跡からは、本地点で出土したものと同じ「宮」のほか、「口厨」と訛読できる墨書き土器も出土しており、周辺に展開する那賀郡衙正倉別院と平津駅家の複合遺跡とみられる大串遺跡（第7地点）や官衙周辺集落とみられる梶内遺跡との関連性が想起される。

III 調査の方法と基本層序

1 調査の方法

調査区は水戸市教育委員会による試掘の結果をもとに設定した。表土除去は重機を使用して遺構確認まで掘り下げた。その後人力作業により遺構確認を行い、堅穴建物跡9棟、掘立柱建物跡2棟、不明遺構1基を確認し、遺構の掘り下げを行った。遺構の測量は、世界測地系平面直角座標第IX系上の公共座標に基づいて行なった。公共座標上では、調査範囲外側の北西角のX軸37,304、Y軸62,508を起点として、南方向と東方向に4mおきにグリッドラインを設定し、交差したマス目にA1からJ12までグリッド名を振り遺構の位置を示した。

調査は表土削除、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。遺構の記録は1/20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、1/10、1/20を使用した。遺跡全測図は1/200で作成した。写真撮影は、白黒35mm判、リバーサル35mm判、デジタルカメラを使用し、調査の各段階に随時行った。

2 基本層序（第3図）

調査区の基本堆積土層は、A地点で記録した（第4図）。

I層は黒ボク層で、約10cmの厚さがあり、やや粘性と締まりがある。

II層はI層からIV層への漸移層である。

IV層はソフトローム層である。

V層はIV層とほぼ同色だがハードローム化していて、VI層のハードローム層への漸移層である。

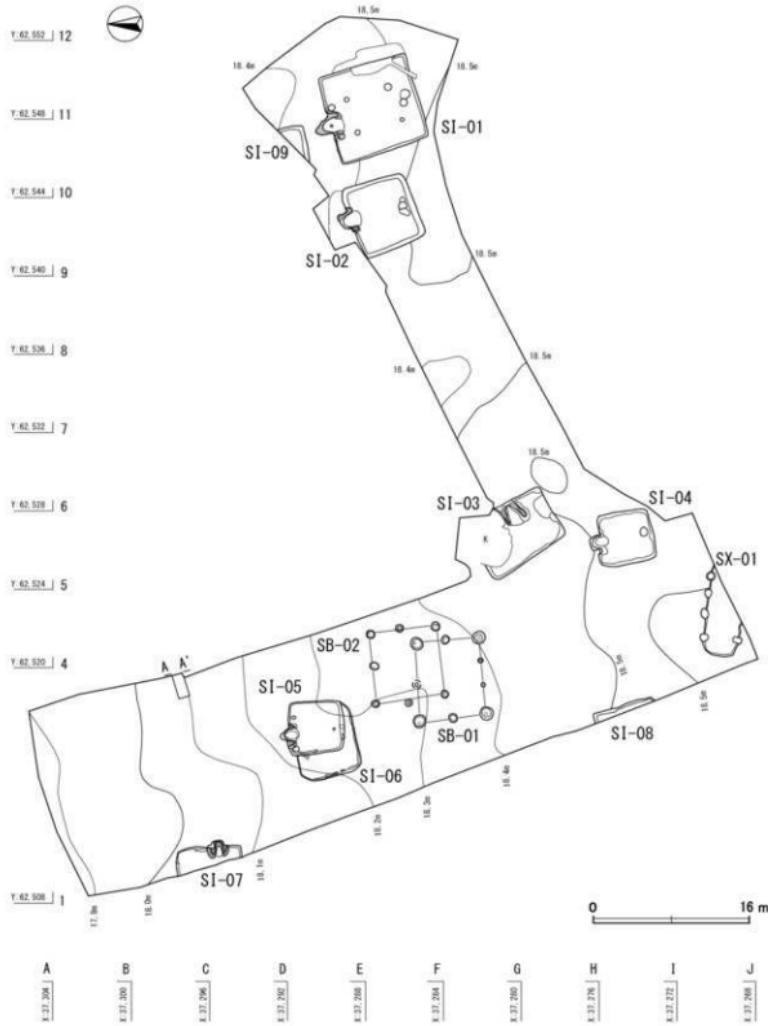
VI層はやや暗いハードローム層でやや粘性がある立川ローム層の第二暗色帯と考えられる。

VII層は赤城山鹿沼バミス（Ag-KP）である。

VIII層は黄褐色のハードローム層、IX層は灰黄褐色のハードローム層でいずれも粘性がある。



第3図 基本層序



第4図 小原遺跡全体図

IV 遺構と遺物

1 堅穴建物跡

1号堅穴建物跡 (第5・6・7・8図、第3表、写真図版1・2・5)

位置 調査区東部にある。

規模と平面形 南北方向4.56m、東西方向4.52mのほぼ正方形。

主軸方向 N-18°-E

壁 壁は約43cmの高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で、西側4分の1程度と北東部分を除いて全体に硬化している。東壁中央部からやや南寄りにかけての床から壁が攪乱を受けている。床面の周囲の壁周溝は、堅穴内の覆土を除去し床面を精査したところ、幅4~10cmで確認された。堅穴建物跡の掘り方は、中央部がやや深くなるように掘られ、出入り口ピット付近も不整楕円形にやや深く掘り下げられている。壁周溝の掘り方は、床面を厚さ約5cm掘り下げた段階で確認できたもので、幅約20cm、深さ8cm前後の構状である。

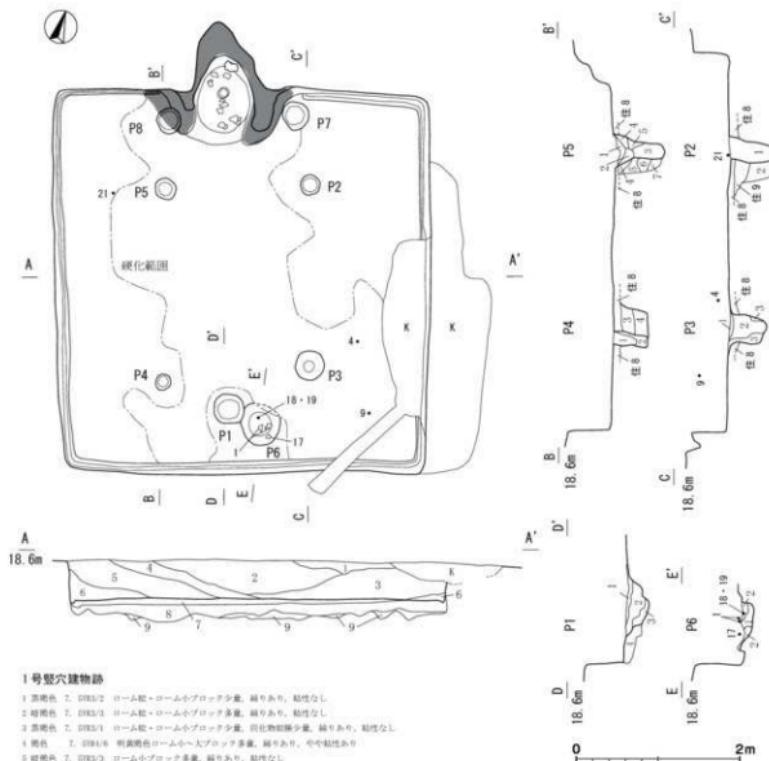
ピット 主柱穴は、床面中央のP2・P3・P4・P5である。P2は下端長径約25cmのやや細身の楕円形の掘り方をもっており、これとは別にやや内側の南西にずれた位置に一辺約30cm以上の方形の掘り方が確認された。このことから、P2は方形から楕円形掘り方へと、一度柱の据え替えを行っていると考えられる。古い方形の掘り方は貼り床に覆われて床面では確認できないことから、柱の据え替え後、床面を再構築していると見られる。P3~P5の断面観察では細身の柱穴と、それを囲むやや大きい掘り方が確認できる。P2と同様、大きい掘り方が古い時期でP3~P5も柱の据え替えを行ったと考えられる。

カマド調査の過程で4本の主柱穴以外に、主柱に相当する深さと規模をもつP7・P8がカマドの両袖外側に確認された。P3・P4と組み合って、床面中央の主柱穴に次ぐ時期の4本主柱穴となる可能性が高い。

P1は掘られた位置と掘り込みの形状・土層の堆積状況から見て、出入り口ピットと思われる。P6はそれより古い出入り口ピットの抜き取り穴になるものと見られ、ここから須恵器坏片や砥石が出土している。P6は主柱穴P2・P3・P4・P5、P1は同P3・P4・P7・P8の時期に対応すると考えられる。

カマド 北壁の中央からやや西に位置し、カマドの中心から東側の北壁幅を1.0とした場合、西側の北壁幅の比率は0.85である。カマドの規模は両袖外側で全幅1.4m、各袖幅は0.54から0.66m、燃焼室の幅は0.65m、焚き口から支脚設置位置までの奥行きは0.6m、燃焼室全体の奥行きは煙道部に向かう傾斜の変換点まで0.93mある。両袖部とも燃焼室奥壁から貼り付けられた灰褐色粘土を主体として構築されている。カマドの中心位置をカマド窓の位置、つまり支脚の設置痕の位置とすると、カマドの中心はカマド左右の北壁を結んだ線上に位置する。

覆土 確認面からの覆土の厚さは40cm程度で、1~6層に分層した。東西南北の各壁際には黒褐色の6層が自然堆積層と見られる三角堆積をしている。1~5層は人為的な埋め戻し土層と見られ、ローム粒やローム小ブロックの含有が多い。5層と4層は西壁側から埋められた堆積状況で、暗褐色土の5層



1号堅穴建物跡

- 1 黒褐色 T. 0083/2 ローム壁・ローム小プロック多量。縫りあり、粘性なし。
- 2 黒褐色 T. 0083/3 ローム壁・ローム小プロック多量。縫りあり、粘性なし。
- 3 黑褐色 T. 0083/1 ローム壁・ローム小プロック少量。汚物細胞少量。縫りあり、粘性なし。
- 4 黑褐色 T. 0083/6 明黄色ロームへ大プロック多量。縫りあり、中粘性あり
- 5 黑褐色 T. 0083/2 ローム壁・ローム小プロック多量。縫りあり、粘性なし
- 6 黑褐色 T. 0083/3 ローム壁・ローム小プロック少量。縫りあり、粘性なし。
- 7 黑褐色 T. 0083/2 ローム壁・ローム小・中プロック少量。縫りあり、中粘性あり
- 8 黑褐色 T. 0083/1 ローム壁多量。ロームへ大プロック多量。縫りあり、中粘性あり
- 9 黑褐色 T. 0083/4 ローム小・大プロック主張。縫りあり、中粘性あり

1号堅穴建物跡 P1

- 1 黑褐色 T. 0083/2 ロームプロック多量。ローム中・プロック少量。縫りあり、粘性なし。
- 2 黑褐色 T. 0083/3 ローム小・中プロック中量。縫りあり、粘性なし。
- 3 黑褐色 T. 0083/1 ローム小・中プロック多量。縫りあり、中粘性あり
- 4 黑褐色 T. 0083/3 ローム小・中プロック少量。縫りあり、中粘性あり

1号堅穴建物跡 P2

- 1 黑褐色 T. 0083/2 ローム壁多量。ローム小プロック少量。縫らぶら。
- 2 黑褐色 T. 0083/3 黄色ローム小・大プロック多量。やや縫りあり。粘性なし。

1号堅穴建物跡 P3

- 1 黑褐色 T. 0083/2 ローム壁少量。やや縫らぶら。
- 2 黑褐色 T. 0083/3 ローム壁・ローム小プロック主張。縫らぶら。
- 3 黑褐色 T. 0083/3 ローム壁多量。ローム小プロック多量。やや縫りあり。粘性なし。

1号堅穴建物跡 P4

- 1 黑褐色 T. 0083/2 ローム壁少量。やや縫らぶら。
- 2 黑褐色 T. 0083/3 ローム壁・ローム小・中プロック主張。縫らぶら。
- 3 黑褐色 T. 0083/3 ローム小・大プロック少量。縫りあり、中粘性あり
- 4 黑褐色 T. 0083/3 ローム小・大プロック主張。縫りあり。中粘性あり

1号堅穴建物跡 P5

- 1 黑褐色 T. 0083/4 ローム壁中量。縫らぶら。
- 2 黑褐色 T. 0083/2 ローム壁少量。縫らぶら。
- 3 黑褐色 T. 0083/3 ローム壁中量。縫らぶら。
- 4 黑褐色 T. 0083/3 ローム壁多量。やや縫らぶら。
- 5 黑褐色 T. 0083/3 ローム小・大プロック多量。やや縫りあり。粘性なし。
- 6 黑褐色 T. 0083/4 ローム壁少量。やや縫りあり。粘性なし。
- 7 黑褐色 T. 0083/4 ローム壁主張。縫りあり。粘性なし。

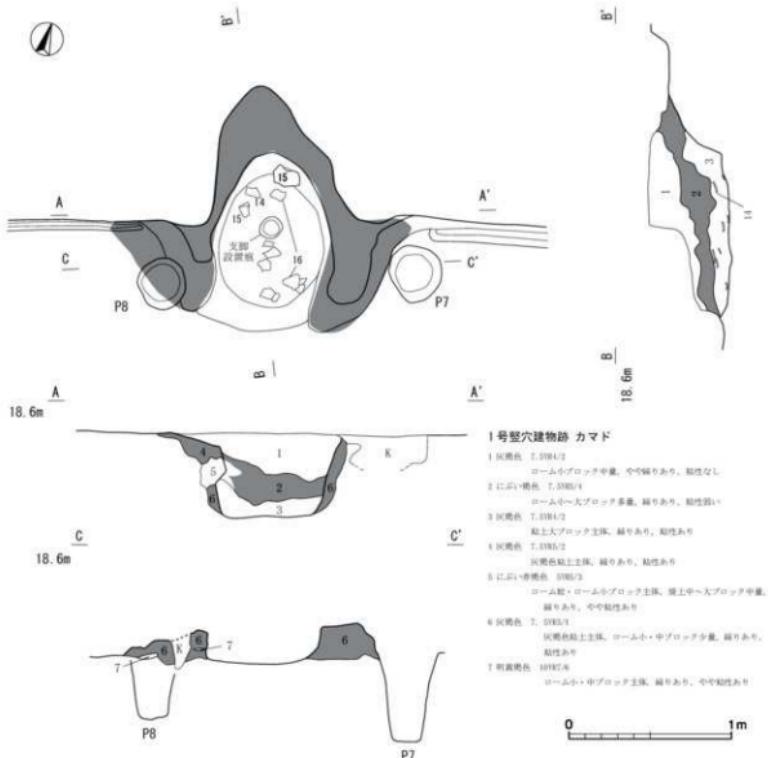
1号堅穴建物跡 P6

- 1 黑褐色 T. 0083/2 ローム壁少量。縫らぶら。
- 2 黑褐色 T. 0083/3 ローム壁中量。ローム小・中プロック多量。縫りあり。中粘性あり。

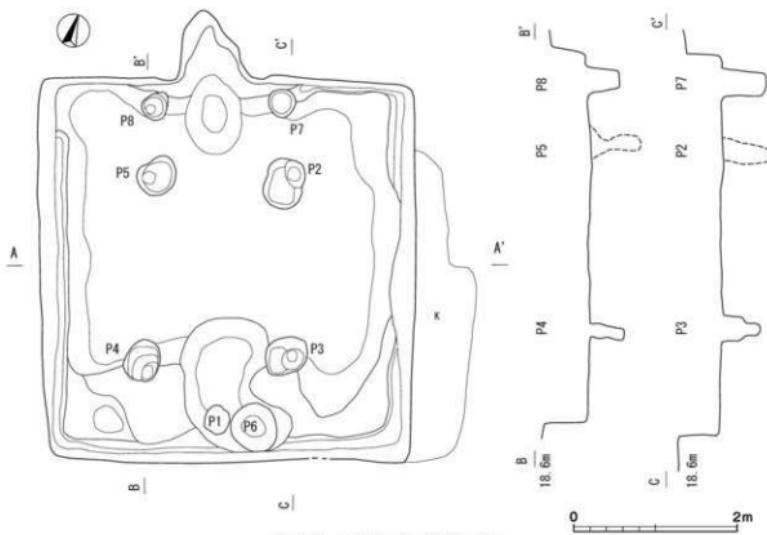
第5図 1号堅穴建物跡

の上に、地山の関東ローム層を直接掘削して流し込んだような、ほとんど混じりのない褐色土の4層が堆積している。次に東壁側の壁際に積み上げるようにロームブロック混じりの黒褐色土の3層、中央部に暗褐色土の2層が入れられている。

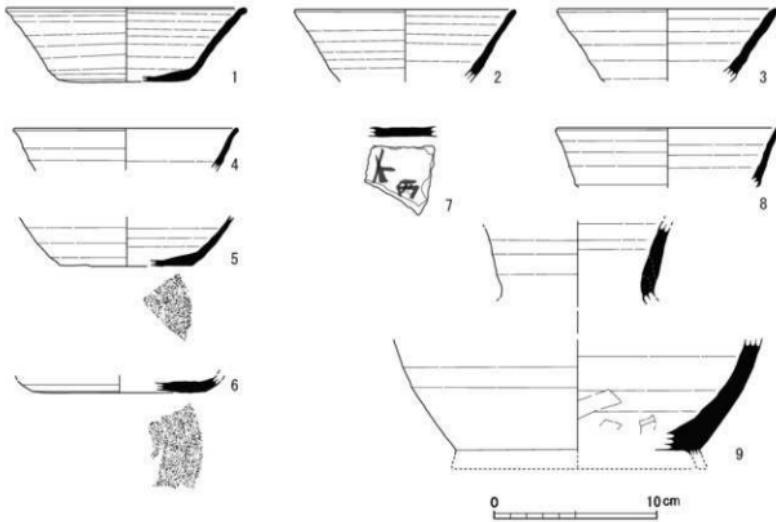
遺物 出土遺物は須恵器と土師器、砥石、鉄製品の刀子と鎌、角棒状の不明品である。須恵器の器種は壺、壺、鉢（楕）があり、土師器は甕と小型甕がある。遺物の大多数はカマド内覆土、柱穴、床上からの出土である。1の須恵器壺、17の砥石、18の刀子はP6 覆土上層から、2の須恵器壺はカマド脇のP7 覆土から出土している。14の土師器甕はカマド袖部・床下から、15の土師器甕下半部片はカマド・床から出土している。



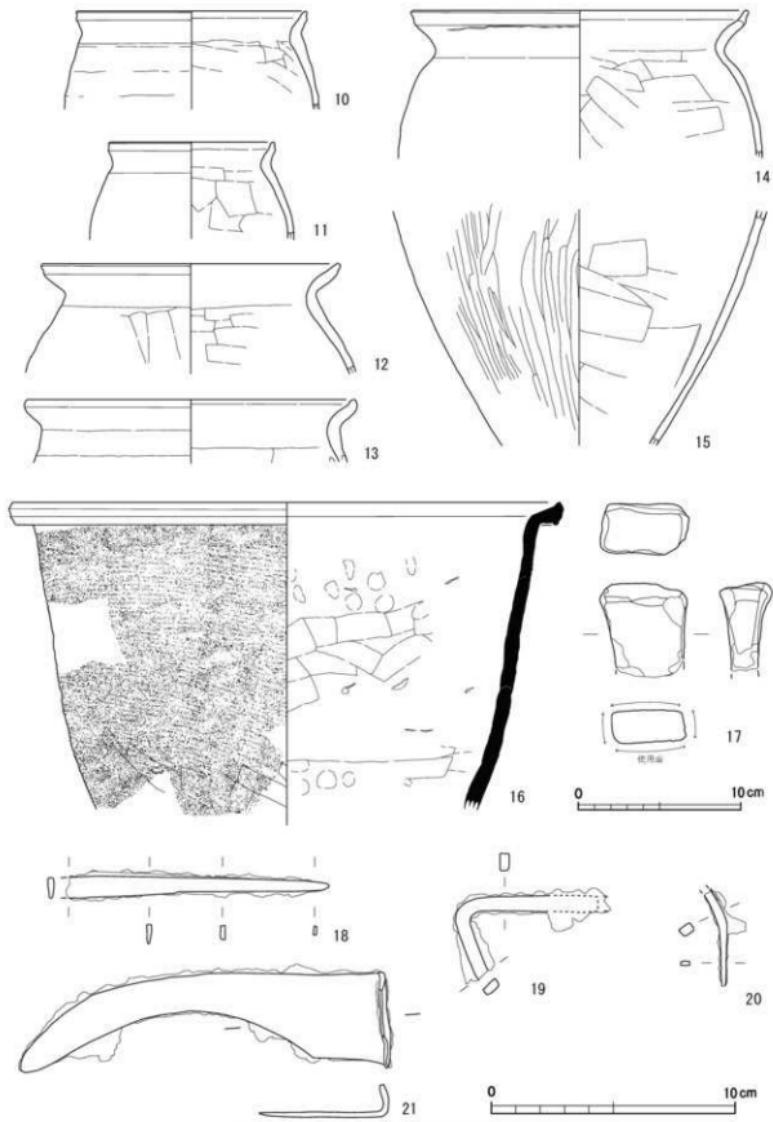
第6図 1号堅穴建物跡カマド



第7図 1号竖穴建物跡掘り方



第8図 1号竖穴建物跡出土遺物 (1)



第9図 1号竪穴建物跡出土遺物（2）

第3表 1号堅穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法面 (cm)			調査所見	残存率	胎土	焼成	色調	外面 内面	備考 記述
			口径	底径	高さ							
1	S101	瓦窯跡・坪	14.8	8.1	8.6	底面斜め切り出し後やすらぎ、丁寧なロクロ調整でロクロ目が削り出される。	80%	長石、石英、陶器骨片、チャート	普通	灰褐色 : 7.5V5/1		No13, 14
2	S101	瓦窯跡・坪	(13.4)	—	—	丁寧なロクロ調整	20%	石英、陶器骨片、チャート	普通	灰褐色 : 7.5V5/1	P1	
3	S101	瓦窯跡・坪	(13.4)	—	—	—	20%	長石、石英、陶器骨片、チャート	普通	灰褐色 : 7.5V5/1	3区一様	
4	S101	瓦窯跡・坪	(13.8)	—	—	—	口縁部小片	石英	普通	灰褐色 : 5V6/1	P1	
5	S101	瓦窯跡・坪	—	(8.2)	—	底面斜め切り出し無調整	10%	長石、石英、陶器骨片、チャート	良好	灰褐色 : 5V6/1	P1	一様
6	S101	瓦窯跡・坪	—	(10.6)	—	底面斜め切り無調整。ロクロ左回転	底面片	石英、陶器骨片、チャート	良好	灰褐色 : 7.5V6/1	3区一様	
7	S101	瓦窯跡・坪	—	—	—	底面外周裏側	底面片	石英、雲母、長石	普通	灰白色 : 3V2/1	1区一様	
8	S101	瓦窯跡・坪	(13.8)	—	—	丁寧なロクロ調整	17%	陶器骨片、長石	良好	灰褐色 : 7.5V6/1	壁面 1区一様	
9	S101	瓦窯跡・塗	—	(15.8)	—	外周部自然崩	底面片	長石、陶器骨片	良好	灰褐色 : 10V8E/3 黄灰色 : 2.5V6/1	No1	
10	S101	土師器・小型壺	(14.2)	—	—	体部外面ナデ。内面へラナデ	口縁部片	石英、雲母、長石	不良	灰褐色 : 10V8E/4 褐色 : 3V6/2.6	カマド一様	
11	S101	土師器・小型壺	(10.2)	—	—	体部外面ナデ。内面へラナデ	口縁部片	石英、雲母、長石	不良	灰褐色 : 7.5V6E/1 灰褐色 : 10V8E/4	カマド一様	
12	S101	土師器・壺	(18.4)	—	—	体部外面ナデ。内面へラナデ	口縁部片	石英、雲母、長石	普通	灰褐色 : 7.5V6E/4 灰褐色 : 7.5V6E/4	4区一様	
13	S101	土師器・壺	(20.6)	—	—	内面へラナデ	口縁部片		良好	褐色 : 7.5V6E/6	3区一様	
14	S101	土師器・壺	(29.8)	—	—	体部外面ナデ。内面へラナデ	口縁部片	石英、雲母、長石	中等	褐色 : 7.5V6E/6	床下、カマド一様、カマド付 No8	
15	S101	土師器・壺	—	—	—	体部外面丸ガタ。内面へラナデ	体底部下半片	石英、雲母、長石	普通	灰褐色 : 5V6E/4 灰褐色 : 5V6E/6	No7, 9, 床	
16	S101	瓦窯跡・鉢(瓶)	(33.7)	—	—	体部外面平切り口。下半部へラカズリ。内面指痕。ヘナナデ	口縫部～ 体底部片	石英、雲母、長石	中等 不良	灰褐色 : NS/	新治窯跡群 No4, 10, 11, カマド、床	
17	S101	石製品・研石	残長5.1	幅5.4	厚さ3.1	重畠96.18g、凝灰岩						No16
18	S101	鉄製品・刀子	残長10.8	幅0.9	厚さ0.2	重畠7.47g						No15
19	S101	鉄製品・フルム切刃	残長8.6	幅0.55	厚さ0.4	重畠12.75g	解説部から触部への屈曲部力					No15
20	S101	鉄製品・矛頭	残長3.9	幅0.55	厚さ0.35	重畠2.59g						
21	S101	鉄製品・鏃	長さ15.3	幅3.9	厚さ0.22	重畠56.38g						No3

2号堅穴建物跡 (第10・11・12図, 第4表, 写真図版2・6・7)

位置 調査区東部にある。

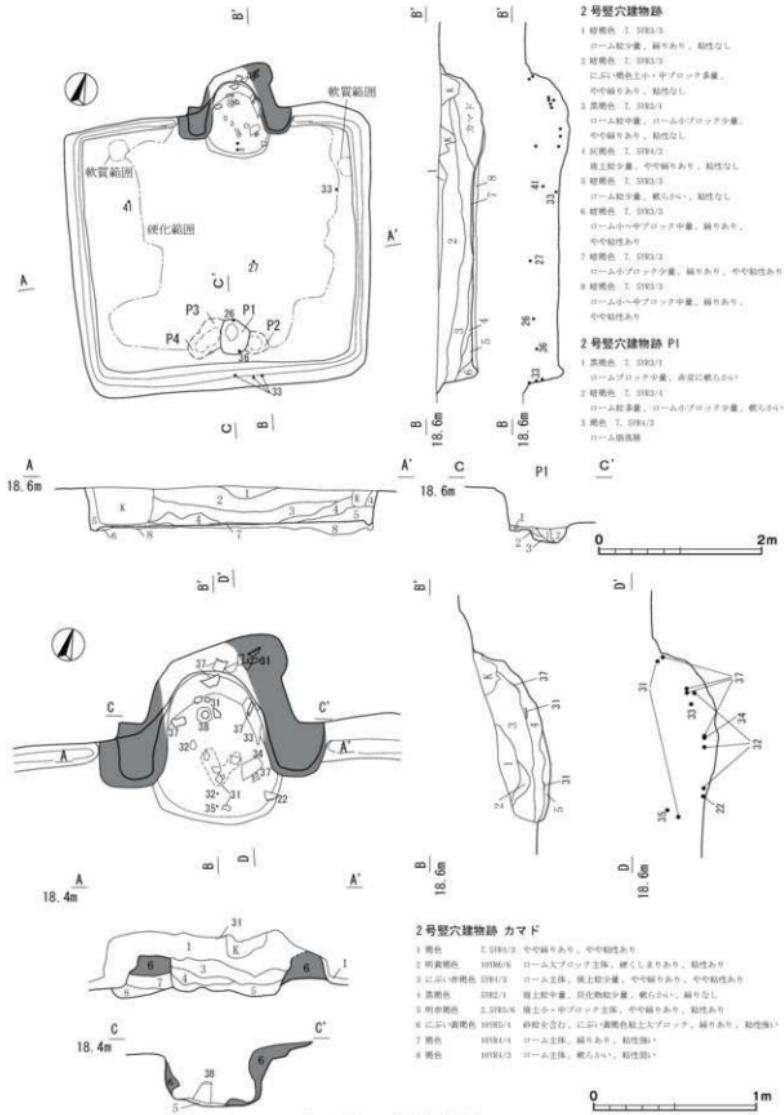
規模と平面形 南北方向3.21m, 東西方向3.47mのほぼ正方形。

主軸方向 N-24°-W

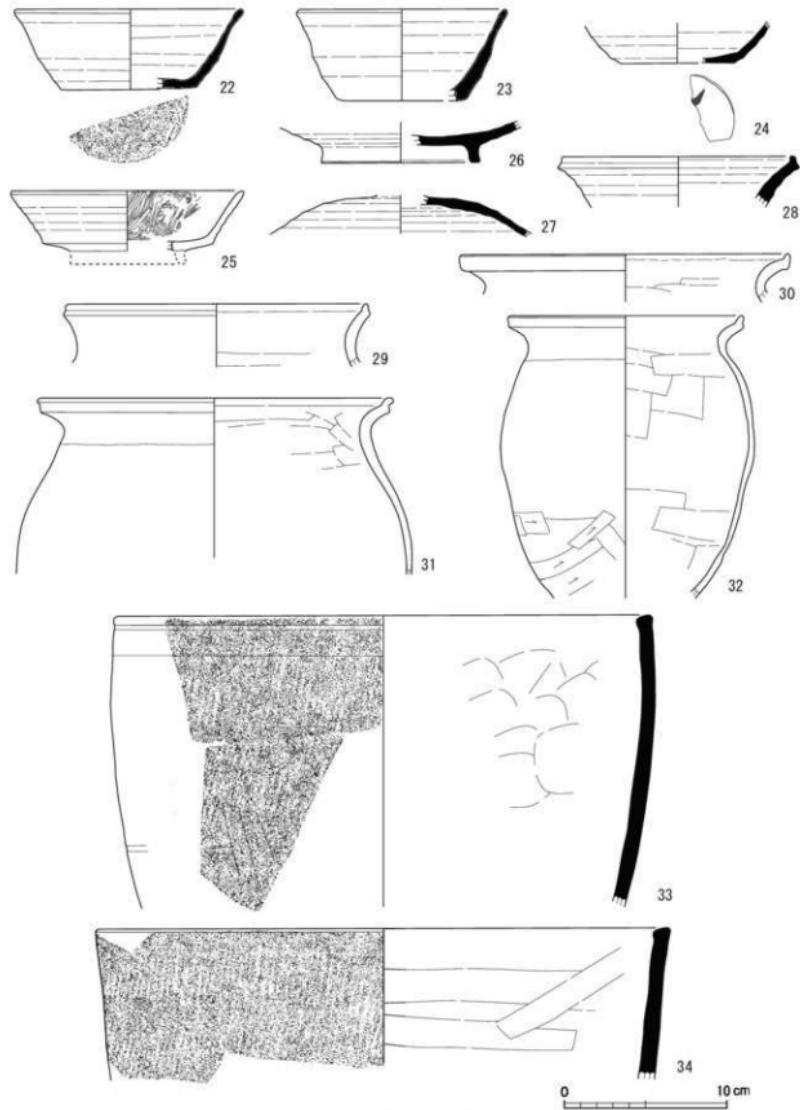
壁 壁は約36cmの高さまで残存し, やや外傾しながら立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で, 西・南・東壁際を除いて全体に硬化している。壁周溝は, 北東部で幅が5cm前後の狭い幅で, それ以外の場所では壁周溝の掘り方幅で確認されている。堅穴建物跡の掘り方は東壁際がやや深く床面から17cm程, 西部から中央部は深さ2~8cmと浅い。壁周溝の掘り方は, 幅約20cm前後, 深さ15cm前後である。

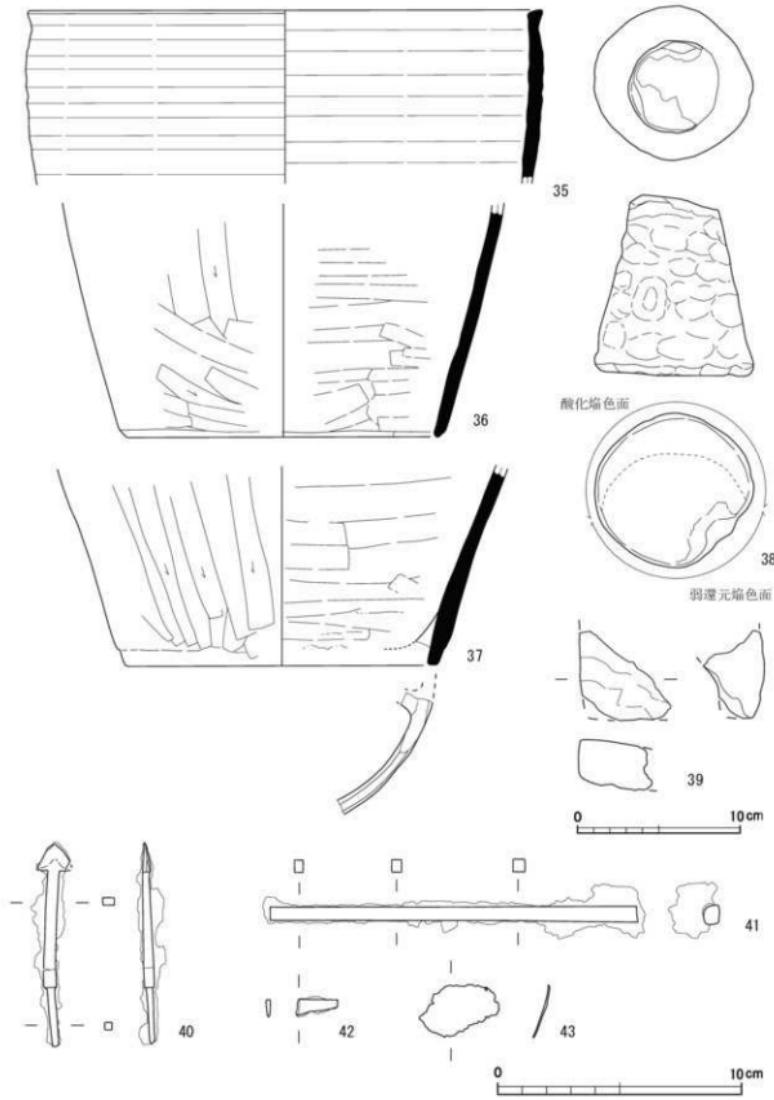
ピット 床面で確認されたP1は, 南側壁が傾斜していることから, 出入り口ピットと見られる。P2・P3・P4は床下で確認された。いずれも深さ数cmの浅い崖みで, 性格は不明だが平面的な位置関係からは古い出入り口ピットの可能性も残る。



第10図 2号堅穴建物跡



第11図 2号竪穴建物跡出土遺物（1）



第12図 2号竖穴建筑物跡出土遺物（2）

カマド 北壁の中央からやや右に位置し、カマドの中心から左側の北壁幅を1.0とした場合、右側の北壁幅の比率は0.8である。カマドの規模は両袖外側での全幅1.4m、各袖幅は0.40～0.45m、燃焼室の幅は0.62m、焚き口から支脚設置位置までの奥行きは0.67m、燃焼室全体の奥行きは煙道部に向かう傾斜の変換点まで0.95mである。カマドの燃焼室内の中心線から向かって左側に寄った位置に土製支脚が立ったままの状態で残存していた。支脚はカマド左右の北壁を結んだ線よりも約20cm屋外側に設置されていた。カマドの袖部はにぶい黄褐色粘土を主体として構築されている。

覆土 覆土は上層の2層がにぶい褐色土ブロックを多量に含んだ暗褐色土を主体としており、人為的な埋め戻し土層と見られる。下層の4層は焼土粒を含んだ灰褐色土層で、カマドの崩壊に伴う土層である。3層は黒みの強い黒褐色土の腐植土を含んだ土層で、落下した有機質からなる屋根材を主体とする土層の可能性がある。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器、土製品のカマド支脚、砥石、鉄製品の刀子と鉄鏃、不明銅製品が出

第4表 2号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器種	法量(cm)			風漬所見	残存率	断土	地成	色調	外層 内層	備考記
			直径	底径	高さ							
22	S102	須恵器・坪	(14.2)	(8.5)	5.0	底部へ切り離し後ナガ、底部へナガ等「一」	85%	陶織骨針、チャート	普通	灰白色：377/2	23とは同断土、同制作出 No.19、4区一柄	
23	S102	須恵器・坪	(13.0)	(7.8)	5.6	内面にねじれの跡の跡の上位 底邊部有様の留め合せあり	口縁部～ 底部片	陶織骨針、チャート	普通	灰白色：377/2	22に同じ 2区一柄	
24	S102	須恵器・坪	—	(7.6)	—	底部へ切り離し粗調整、 底部要素	体部下端片	良石、陶織骨針、 チャート	普通	灰色：315/1	2区一柄	
25	S102	土師器・ 高台付坪	(14.0)	—	—	内墨・ミガキ	体部片	無砂粒、 金雲母微粒	やや 不良	褐色：7.000.00/ 黑色：572/1	4区一柄	
26	S102	須恵器・盤	—	(9.8)	—	底部削除へラケズリ、 ロクロ付脚、内面に径9cm の重ね縫合	高台部片	長石、陶織骨針、 チャート	良好	灰褐色：7.005/1	No5	
27	S102	須恵器・蓋	—	—	—	天井部削除へラケズリ	天井部片	陶織骨針、 チャート	普通	灰褐色：7.005/1	No4	
28	S102	須恵器・蓋	(14.4)	—	—	—	口縁部片	長石、石英	良好	灰褐色：7.006/1	4区一柄	
29	S102	土師器・蓋	(16.6)	—	—	口縁部内外面コナダ	口縁部片	石英、 雲母、 長石	良好	にぶい褐色：7.005/1	3区一柄	
30	S102	土師器・蓋	(20.4)	—	—	口縁部内外面コナダ	口縁部片	石英、 雲母、 長石	良好	褐色：7.006/4	2区一柄	
31	S102	土師器・蓋	(22.0)	—	—	体部外表面、内面へナタゲ	口縁部片 体部下端片	石英、 雲母、 長石	やや 不良	明赤褐色：315/8 褐色：7.006/3	No17, 18, 25, 31	
32	S102	土師器・蓋	14.6	—	—	体下端削除へラケズリ、 内面へナタゲ	40%	石英、 雲母、 長石	普通	明赤褐色：315/6 褐色：7.005/8	No16, 17, 18, 27	
33	S102	須恵器・瓶	(23.4)	—	—	体部外表面切削後 剥離部付コナダ	口縁部片	石英、 陶織骨針、 チャート	不良	にぶい黃褐色：10006/3	No2, 7, 8, 9, 23	
34	S102	須恵器・瓶	(25.6)	—	—	体部外表面切削後 剥離部付コナダ	口縁部片	良石、 陶織骨針、 チャート	不良	にぶい黃褐色：1.006/3 にぶい黃褐色：1007/4	No20, 33	
35	S102	須恵器・瓶	(32.6)	—	—	体部外表面コナダ	口縁部片	良石、 石英、 陶織骨針	やや 不良	にぶい黃褐色：10006/4 (2.5-3)美玉：2.006/4	No3	
36	S102	須恵器・瓶	—	(18.2)	—	体部外表面へラケズリ、 内面へナタゲ	底部片	陶織骨針、 チャート	良好	灰褐色：2.006/2	No6	
37	S102	須恵器・瓶	—	(19.2)	—	体部外表面へラケズリ、内面 へナタゲ、底部至孔式か	底部片	陶織骨針、 チャート	不良	浅黄色：2.007/4	33と34の 底部片か No20, 21, 24, 26, 29	
38	S102	土製系・支脚	長さ11.1	幅9.8	厚さ8.6	—	—	全雲母化	—	体部1/2細化褐色成色 直面と体部下半分の一割は の還元色	No32	
39	S102	石製品・砥石	長さ3.5	幅3.6	厚さ2.1	重積22.0kg	—	—	—	—	凝灰岩 2区一柄	
40	S102	鉄製品・鍔	長さ8.1	幅1.5	厚さ0.42	重積6.7kg	—	—	—	—	2区一柄	
41	S102	鉄製品・クルムイ	長さ15.2	幅0.5	厚さ0.1	重積26.0kg	解説部か	—	—	—	No18	
42	S102	鉄製品・刀子	長さ1.7	幅0.6	厚さ0.2	重積0.57kg	—	—	—	—	覆土	
43	S102	鉄製品・不明	長さ3.3	幅2.1	厚さ0.1	重積2.12kg	—	—	—	—	2区一柄	

土している。須恵器の器種は壺、盤、蓋、壺、瓶があり、土師器は高台付壺と甕がある。遺物の出土状況は、覆土上層中とカマド内覆土、床上から出土しているものに分かれる。22の須恵器壺はカマドの崩壊土に覆われてカマド焚き口部付近から、31・32・33・34・35・37の土師器甕や須恵器瓶はカマド内から、38の土製支脚はカマド内から原位置を保った状態で出土している。41の不明鉄製品は断面が正長方形の角棒状の製品で、カマド覆土からの出土である。

3号竪穴建物跡（第13・14・15図、第5表、写真図版2・7）

位置 調査区の中央部にある。

規模と平面形 南北方向4.37m、東西方向2.92mの南北方向に長い長方形。

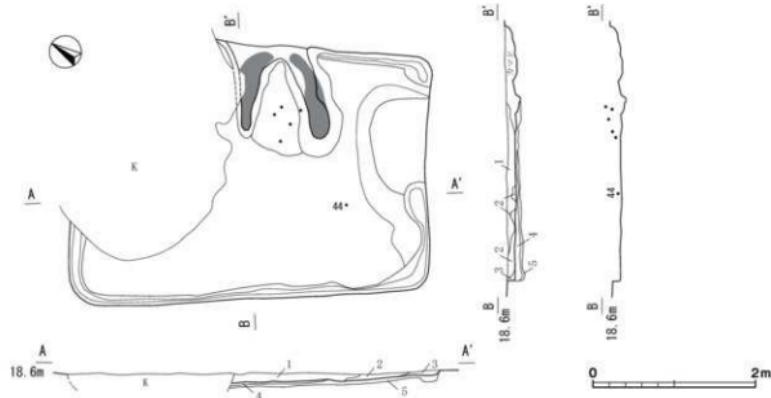
主軸方向 N-54°-E

壁 壁は約10cmの高さまで残存している。

床 床面は南壁際の出入り口部と見られる約8cmの高まり部がある以外、ほぼ平坦で全体にやや硬化している。北壁から東壁の北部にかけて擾乱によって床面が壊されている。床面周囲の壁周溝は幅10cm前後、深さ5cm前後で、南壁東寄りが切れている。

ピット 主柱穴はない。カマドに向かって右袖と竪穴東壁との間に、甕などの容器を安定的に置くためではないかと考えられる円い痕跡を複数観察したが、ごく浅く不明瞭なためピットと認定するに至らなかった。

カマド 東壁の中央に位置する。奥壁は東壁に接し、袖部は屋内に設けられている。全幅1.3m、袖の長さ1.3m、燃焼室の幅は0.6mで、袖部の構築土として小礫が多く含んだ褐色粘土を使用している。



3号竪穴建物跡

1 黒褐色 T.0931/1 ローム粘少量、弱りあり、粘性弱い。

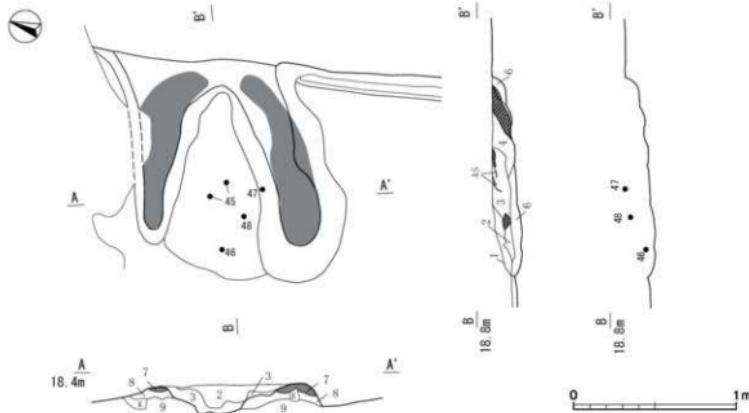
2 灰褐色 T.0931/3 ローム粘少量、粘性上少、中ブロック、少量、弱りあり、中や粘性あり

3 黑色 T.0931/3 ローム粘少量、中や弱りあり、粘性なし

4 灰褐色 T.0931/2 ローム少、中ブロック少量、弱りあり、粘性なし

5 地山 T.0931/3 ローム少へ大ブロック主体、弱りあり、中や粘性あり

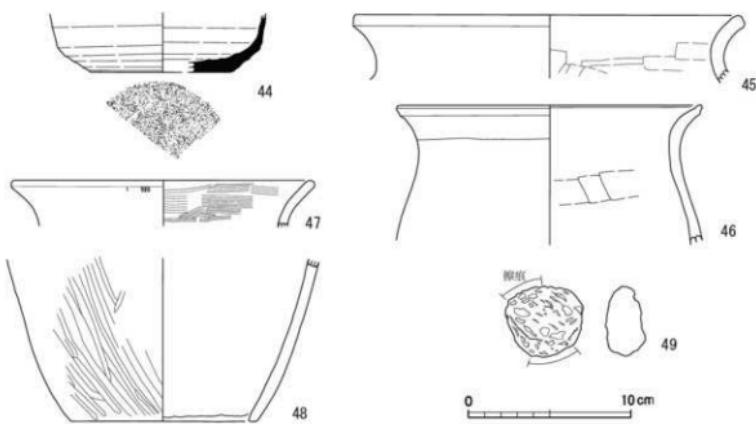
第13図 3号竪穴建物跡



3号竖穴建物跡 カマド

- | | | | | | |
|----------|---------|--------------------------------|----------|---------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | 03RS/2 | 壁土小・中プロック中～多量、縫りあり、粘性弱い | 6 緑歩道色 | 03RS/4 | ローム主体、被照層、縫りあり、粘性弱い |
| 2 にじみ黒褐色 | 03RS/4 | 壁土大・中プロック・粘土質、縫りあり、やや粘性弱い | 7 にじみ褐色 | 7.0RS/4 | にじみ褐色粘土小～大プロック主体、小縫、縫りあり、粘性あり |
| 3 明赤褐色 | 2.5RS/6 | 壁土小～大プロック・土間部便器類多量、縫りあり、やや粘性あり | 8 にじみ赤褐色 | 3.0RS/4 | ソフトローム小・中大プロック主体、やや軟らかく、粘性なし |
| 4 細赤褐色 | 03R/3 | 壁土小プロック少量、底土小～中プロック少量、鉄化物含む灰層 | 9 緑歩道色 | 03RS/4 | 被照ローム、縫りあり、やや粘性あり |
| 5 にじみ赤褐色 | 03R/3 | 壁土小プロック多量、縫りあり、粘性なし | | | |

第14図 3号竖穴建物跡カマド



第15図 3号竖穴建物跡出土遺物

第5表 3号堅穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器種	寸法(cm)		観察所見	残存率	胎土	構成	色調	備考注記
			口径	底径						
44	S103	須恵器・甕	—	(8.6)	—	底部凹面へラケズリ。 口沿に凹面剥離。	25%	長石、チャート、 陶器骨粉	やや不良	灰白色: 5Y7/2 No12
45	S103	土師器・甕	(24.0)	—	—	口縁部内外面ヨコナデ。 体部内面へラナデ。	口縁部片	長石、石英、雲母	良好	褐色: 7, 5Y8/8 No5, 13
46	S103	土師器・甕	(18.8)	—	—	体部内面ナデ、内面へラナデ	口縁部片	石英、陶器骨粉	青浦	灰黃褐色: 10Y8/2 No7
47	S103	土師器・甕	(18.8)	—	—	口縁部内面横凹ハケズ。 外表面方向カハケメヨコナデ	口縁部片	雲母	良好	にぶい褐色: 10Y7/3 No9
48	S103	土師器・甕	—	(11.6)	—	体部外面ミガキ。内面剥離	体下半部片	長石、石英、雲母	良好	にぶい褐色: 7, 5Y8/4 No8
49	S103	石製品・軽石	長さ 1.8	幅 4.3	厚さ 2.4	重量 12.07g	側面部に擦痕が 2カ所あり			
										3区覆土

覆土 覆土は厚さ約 10 cm 残存し、縮まりのある黒褐色土を主体としている。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器、磨痕の見られる小型の軽石が出土している。須恵器は床上から 44 の甕が、土師器はカマド覆土から 45・46・47 の甕、48 の甕が出土している。44 の須恵器は、静岡県湖西窯では碗とされている（鈴木 2000）が、同器形の遺物が茨城県内資料では明確でないので、ここでは壺としておく。

4号堅穴建物跡（第16・17図、第6表、写真図版6・7）

位置 調査区南西部にある。

規模と平面形 南北方向は東壁側 2.54 m、西壁側 2.78 m、東西方向は 2.54 m で、西半分がやや南北に長い方形。

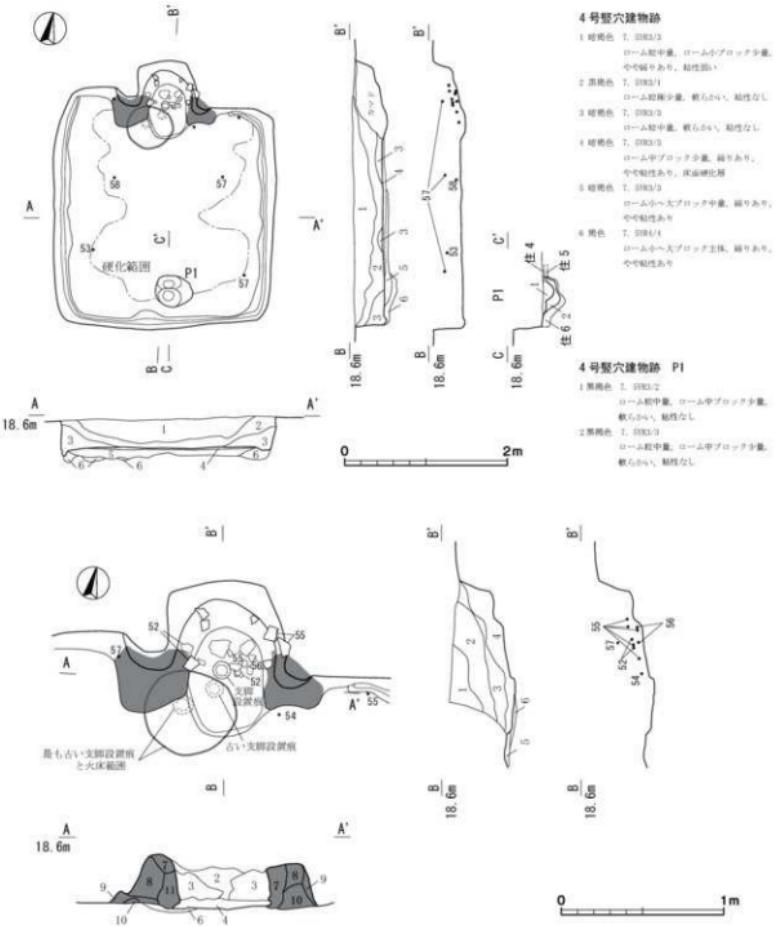
主軸方向 N-12° - W

壁 壁は約 35 cm の高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

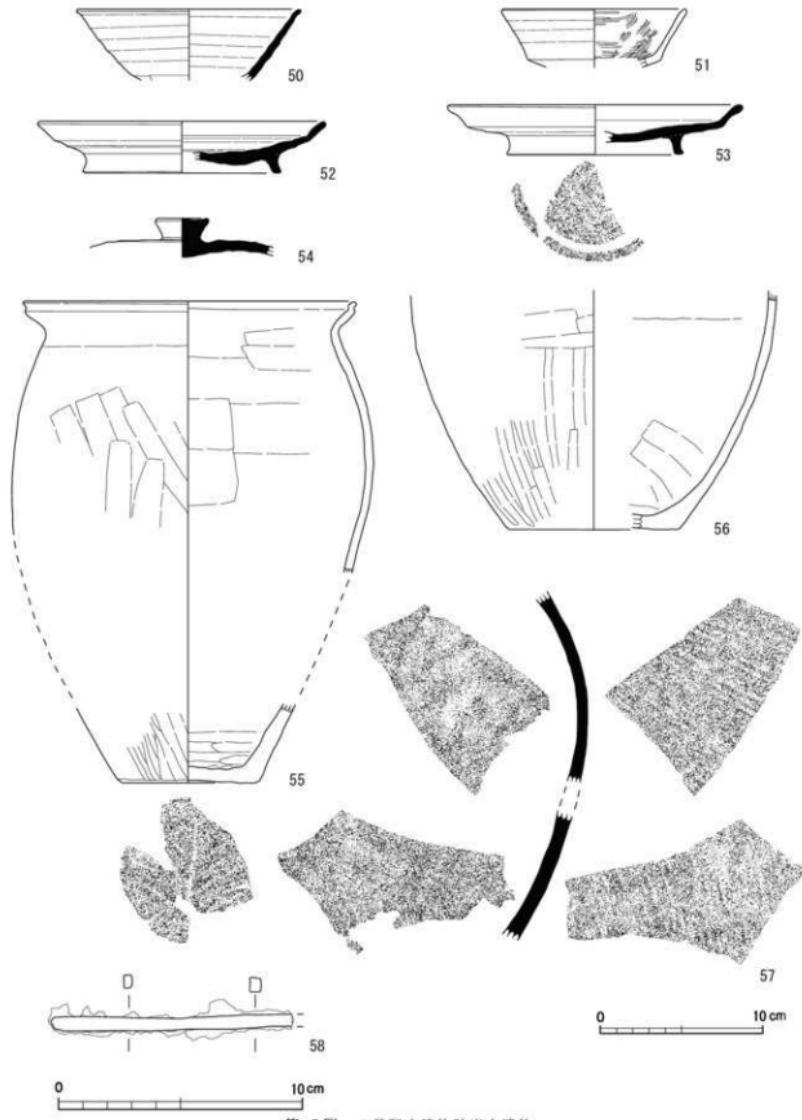
床 床面はほぼ平坦で、カマド前面から P1 まで堅穴中央部が硬化している。床面は 2 時期あり、最終床面である 4 層上面は厚さ 2 ~ 3 cm の暗褐色土が古い床面の中央部に載せられて構築されている。次いで古い床面である 5 層上面もよく硬化していた。床面周囲の壁周溝は、幅約 5 ~ 10 cm で確認された。壁周溝の掘り方幅は約 16 cm で重複は見られないので、床の補修に伴う大がかりな堅穴の改築がないのか、最終の床面構築時に再度掘削しているのかどちらかと思われる。堅穴建物跡の掘り方は中央部がやや高く床面から 3 cm 程の深さ、床面の壁寄りは 10 cm 前後の深さで最深部は 15 cm 程である。

ピット 主柱穴はない。P1 は出入り口ピットで下端が 2 箇所確認されている。北側の浅い方（P1 土層断面図の 1 層）が新しく、南側壁寄りの深い部分の落ち込み（同 2 層）が古い出入り口材（木製梯子）の痕跡と見られる。

カマド 北壁のはば中央にある。カマドの幅は 1.17 m、燃焼室幅は 0.64 m、両袖部とも、にぶい黄褐色粘土を主体として、内側ににぶい褐色粘土を貼り付けて構築している。燃焼室中央部には、支脚の設置痕と見られる堆積土の色調に差のある部分が確認された。支脚設置痕はカマド左右の北壁を結んだ線よりも約 6 cm 屋外側に位置する。カマドの左側の北壁は 10 cm ほど屋外側にあるので、カマド両袖の始まりは左右でずれているものの、残存状況が悪いため、袖の先端位置がずれているかどうかは確認でき



第16図 4号竖穴建物跡



第17図 4号竖穴建物跡出土遺物

第6表 4号堅穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土 位置	種別・器種	出量(cm)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	外面 内面	備考 注記
			口径	直径	高さ							
50	S104	須恵器・壺	(13.8)	—	—	体部内面クロロ且は外面上に粒状で剥離。	40%	長石、石英、 陶酸骨針	普通	灰オリーブ色 : 10R6/2 黑色 : 10T2/1	1-4区一例	
51	S104	土師器・高台付壺	(11.0)	—	—	内面墨色処理。ミガキ	30%	無砂粒	普通	灰青褐色 : 10V6/2 黑色 : 10T2/1	4区一例	
52	S104	須恵器・壺	(17.8)	(12.2)	3.2	—	30%	石英、チャート、 陶酸骨針	やや不良	灰黄色 : 2.3T7/2	No10, 17	
53	S104	須恵器・壺	(18.2)	(10.9)	3.1	—	40%	石英、陶酸骨針	良好	灰黄色 : 2.3T7/2 灰色 : 3W6/1	No5	
54	S104	須恵器・壺	—	—	—	—	25%	陶酸骨針	良好	灰色 : 3W6/1	No6	
55	S104	土師器・甕	20.4	8.4	—	体上半部ハラグテ、下半部 ヘラカタ、底部木製板	体上半部 底部片	長石、石英	普通	にぶい赤褐色 : 3R5/4 20, 21	No1, 9, 10, 17, No1, 21	
56	S104	土師器・甕	—	(10.0)	—	体部各部ハラグテ、内面 ヘラカタ。底部指捺	体下半部 底部片	石英颗粒	普通	にぶい黄褐色 : 10R5/4	4区一例 No11, 20	
57	S104	須恵器・甕	—	—	—	体部外面平行引き。 内面無加工	体部片	陶酸骨針	良好	灰色 : 3V4/1	No2, 3, 15	
58	S104	鉄製品・クリル鉗子	長さ [9.8]	幅0.5	厚さ0.4	重量 7.98kg	鉄筋能力					No7

ない。床面の掘り下げによって、支脚設置痕のすぐ南西に一段階古い支脚設置痕が灰層下のカマド基底部に見つかった。さらに、カマドの南西側30cm程のところに、焼土化した古い火床とそれに伴う最も古い支脚設置痕が確認された。

覆土 覆土は厚さ約36cm残存し、1～3層に分層した。3層は住居廃絶直後に壁際に堆積した初期堆積の暗褐色土層、2層は厚さ10cm程の黒褐色土で3層を直接被覆している部分も床面を被覆している部分も同じような厚さで堆積している。外壁がなくなった後の自然流入土層としては厚さが均一であるため、有機質を含む屋根材の落下層の可能性が考えられる。1層はローム小ブロックを多く含む暗褐色土で人為的な埋め戻し土層と見られる。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器、角棒を折り曲げた器種不明の鉄製品が出土している。須恵器の器種は壺、盤、蓋、甕があり、土師器は内黒高台付壺と甕がある。55の土師器甕、52の須恵器盤はカマド覆土から、54の須恵器蓋はカマド右袖下から出土している。50の須恵器壺や53の須恵器盤は覆土からの出土である。57の須恵器甕は堅穴覆土からカマドまでの範囲に広く散らばっていた。

5号堅穴建物跡（第18・19・20・21図、第7表、写真図版3・8・9）

位置 調査区西部にある。

規模と平面形 南北方向2.56m、東西方向2.51mのほぼ正方形。

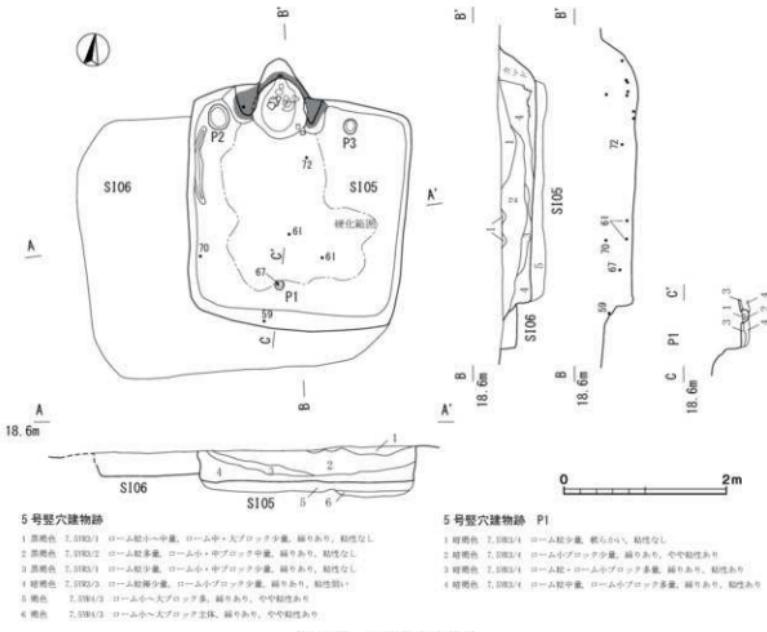
重複関係 6号堅穴建物跡を切っている。

主軸方向 N-5°-W

壁 壁は約40cmの高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で、北東部を除いた住居の中央部付近が硬化している。壁周溝は北西部で一部確認できた。掘り方では四隅にも壁周溝があるように見えるが、床面では確認できなかった。堅穴建物跡の掘り方はカマド前面の住居中央部付近がやや深く、床面から深さ13cm程度である。堅穴南東隅には底面が平らで平面形が長方形、深さ17cmの床下土坑と見られる独立した掘り方が見られた。

ピット カマドの対面の南壁と床硬化面との境で確認されたP1は深さ約10cmで、南側壁が傾斜しており出入り口ピットと見られる。P2とP3は深さ2～3cmのごく浅い窪みで、柱穴ではなく、甕などの容

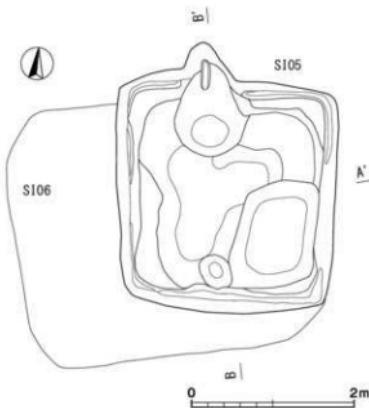


第18図 5号竖穴建物跡

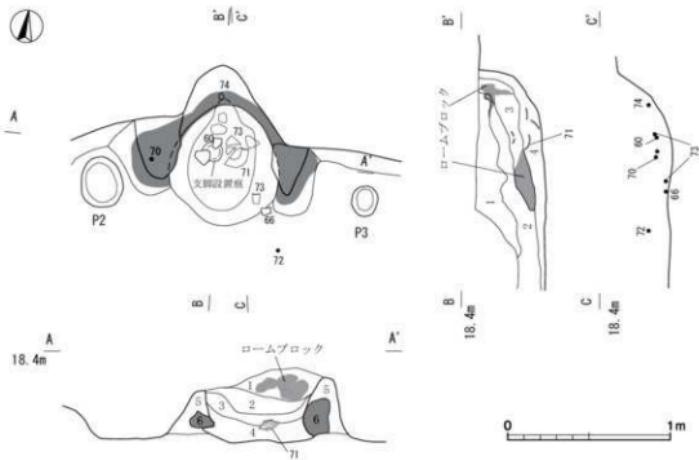
器を置いていた痕跡と見られる。

カマド 北壁の中央からやや左に偏寄った位置にあり、カマドの中心から右側の北壁幅を1.0とした場合、左側の北壁幅の比率は0.62である。規模は両袖外側での全幅1.2m、各袖幅は0.30m前後、燃烧室の幅は0.67m、焚き口から支脚設置痕までの奥行きは0.47m、燃烧室全体の奥行きは煙道部に向かう傾斜の変換点までで0.80mである。カマド燃烧室の支脚痕は、カマド左右の北壁を結ぶ線上に位置している。カマドの袖部はにぶい橙色粘土を基部とし、粘土を多量に含む褐色土で構築されている。

覆土 覆土は4層で、1～3層は全体にロー



第19図 5号竖穴建物跡掘り方



5号堅穴建物跡 カマド

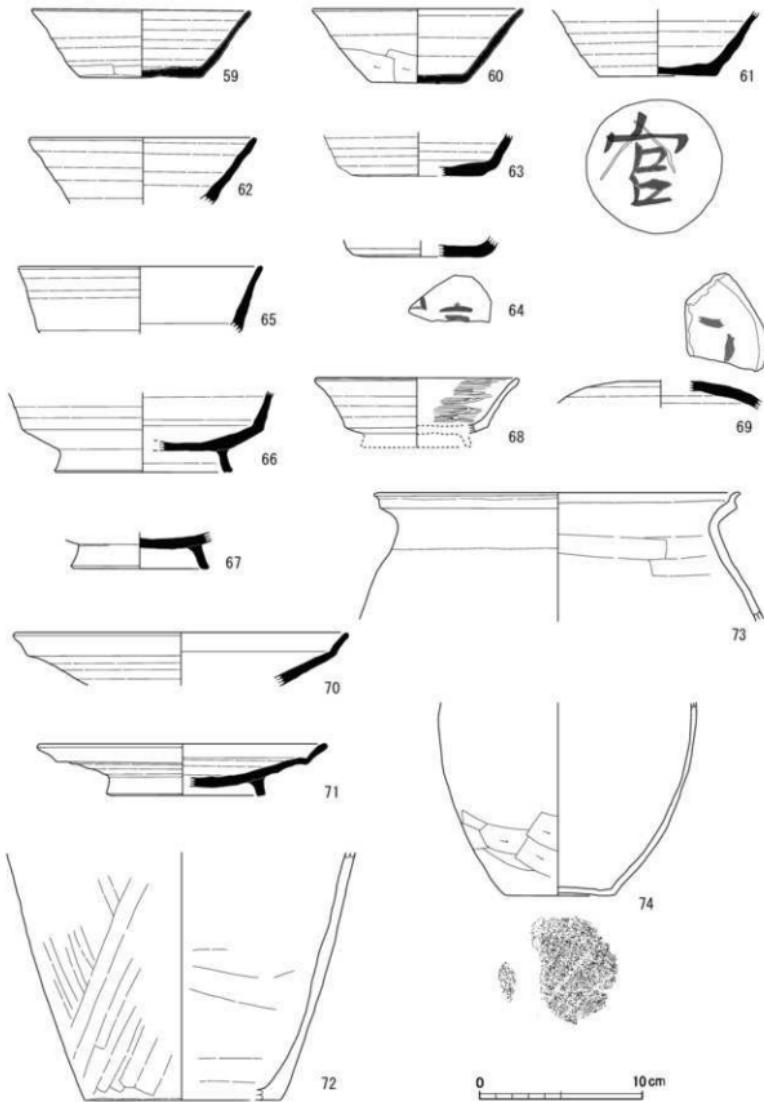
- 1 黒褐色 T.5586/2 黒褐色粘土・中・大ブロック主体。ローム小ブロック多量。縫りあり。粘性あり
- 2 黄褐色 T.5586/3 ローム粘多量。ローム小ブロック少量。粘土粘多量。やや軟らかい。やや粘性あり
- 3 黑褐色 T.5586/2 粘土中・大ブロック多量。土器片多量。粘土粘多量。やや軟らかい。粘性あり

- 4 黑褐色 T.5583/1 酸化物粘多量。軟らかく。粘性なし
- 5 黄褐色 T.5581/3 粘土粘・粘土小ブロック多量。縫りあり
- 6 に似る・褐色 T.5587/3 粘土ブロック多量。縫りあり。粘性あり

第20図 5号堅穴建物跡カマド

ムブロックをある程度含んだ黒褐色土を主体としている。下層の4層はロームブロックを含まない暗褐色土の自然堆積層と見られる。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器が出土している。須恵器は壺、高台付壺、盤、蓋があり、土師器は高台付壺と甕がある。遺物の出土状況は、覆土から出土しているものと、カマド内覆土から出土しているものに分かれる。60・62の須恵器壺、66の須恵器高台付壺、70・71の須恵器盤68の土師器高台付壺、73・74の土師器甕はカマドの覆土から、59・61・63の須恵器壺、65・67の須恵器高台付壺、69の須恵器蓋、64の須恵器壺、72の土師器甕は覆土から出土している。59の壺は体部下端を手持ちヘラケズリした、雲母を含む新治窯跡群産の須恵器である。内外底面に煤の付着があり、灯明皿用途と考えられる。口縁部に3か所の欠損があるが、その部分に灯芯が接触することで過度に被熱し、器体の劣化を招いた可能性がある。60の須恵器壺も新治窯跡群産で底径が小さく、体部下端の手持ちヘラケズリの幅が広く、全体に酸化焰焼成で一部にカマド粘土の付着がある。63の須恵器壺底部片は二次底部面を持っており、古い土器の混入と思われる。61の須恵器壺は海綿骨針を含む木葉下窯跡群産の須恵器で、底部外面には、「宮」の墨書き文字とヘラ記号が見られる。なお、調査の初期の覆土掘り込みに際して、5号堅穴建物跡の3区と4区は6号堅穴建物跡の覆土と同時に掘り込んでいたため、3・4区一括として取り上げられた遺物の中には、6号堅穴建物の覆土に帰属する可能性のあるものを含む。63・64の須恵器壺底部片と69の須恵器蓋、59の壺、65・66の高台付壺はその可能性が考えられる。



第21図 5号堅穴建物跡出土遺物

第7表 5号堅穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	重量(cm)			場所所見	保存率	新土	焼成	色調	床面 内面	備考 注記
			口徑	底径	高さ							
59	S105	瓶壺器・坪	13.3	7.3	6.2	底部多方向へラケズリ。 白練部に次江2型斑、 内面面に横付耳	80%	黒漆	不良	灰褐色 : 2.5W/2	新治塗跡群 No5	
60	S105	瓶壺器・坪	12.8	5.9	4.6	体部下半部分へラケズリ。 底部多方形へラケズリ	90%	黒漆、長折、石舟 やや不良	灰褐色 : 7.5W4/2	新治塗跡群 No6		
61	S105	瓶壺器・坪	—	7.0	—	底部斜面へцаり跡し無調整。 別々ハラ2号、墨書き文字「宮」	90%	長折、商標骨封	普通	灰褐色 : 2.5W6/2	No2, 3	
62	S105	瓶壺器・坪	(14.0)	—	—	ロクロ石舟	30%	長折、チャート、 商標骨封	普通	灰褐色 : 10W5/2	カマド	
63	S105	瓶壺器・坪	—	—	—	底部斜面へцаり跡し、無調整	底部片	長石	普通	灰褐色 : 2.5W6/2	—	
64	S105	瓶壺器・坪	—	(8.0)	—	体部下端斜面へラケズリ、 底部ヘラナード、墨書き	底部片	長石、チャート、 商標骨封	良好	灰褐色 : 2.5W/1	2区一坑	
65	S105	瓶壺器・高台付坪	(15.0)	—	—	—	口縁既片	長折、チャート、 商標骨封	普通	灰褐色 : 10W5/1 灰色 : 5W/1	2区一坑	
66	S105	瓶壺器・高台付坪	—	(11.0)	—	体部下端斜面へラケズリ、 ロクロミガリ	30%	長石、チャート、 商標骨封	良好	灰褐色 : 2.5W6/2	No4	
67	S105	瓶壺器・高台付坪	—	—	—	体部下端斜面へラケズリ、 内面黑色化層、ミガキ	口縁既片	石英焼結	良好	暗灰褐色 : 2.5W5/2	No4	
68	S105	土師器・高台付坪	(12.0)	—	—	体部下端斜面へラケズリ、 内面黑色化層、ミガキ	口縁既片	石英焼結	良好	に赤い黄褐色 : 7.5W7/1 黑色 : 5W2/1	カマド一坑	
69	S105	瓶壺器・壺	—	—	—	天外部上面に墨書き	天外既片	石英、墨書き松	やや不良	に赤い黄褐色 : 10W6/3	新治塗跡 3区一坑	
70	S105	瓶壺器・壺	20.6	—	—	—	30%	長石、チャート、 商標骨封	普通	黄褐色 : 2.5W5/1	No2, 18	
71	S105	瓶壺器・壺	(17.0)	9.8	2.3	内面使用による擦痕、 ロクロ石舟	30%	長石、チャート、 商標骨封	普通	暗灰色 : 2.5W5/2	No2	
72	S105	土師器・壺	—	(12.0)	—	体部外面へラナード、 内面へラナード	体下半部片	長折、石舟、墨書き	普通	に赤い黄褐色 : 10W4/2	No1, カマド 1層	
73	S105	土師器・壺	(22.5)	—	—	体部外面ナダ、 内面ナダ、近鉢木彫版、 体部中段粘土付着	口縁既片	長石、石舟、墨書き	普通	に赤い赤褐色 : 10W4/4	No1, 12, 15, カマド3層	
74	S105	土師器・壺	—	6.7	—	体部外面ナダ、下部へラケズリ 内面ナダ、近鉢木彫版、 体部中段粘土付着	体下半部	石舟	普通	明褐色 7.5W5/6	No17, カマド3層	

6号堅穴建物跡 (第22-23図、第8表、写真図版3・9)

位置 調査区西部にある。

規模と平面形 南北方向3.03m、東西方向(3.60)mの東西に長い長方形。

重複関係 5号堅穴建物跡に切られており、住居北東部とカマドは確認できない。

主軸方向 N-13°-W

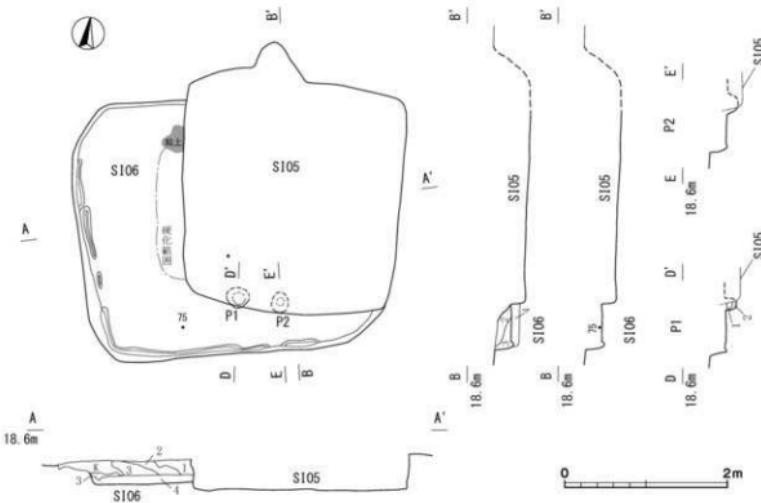
壁 壁は約18cmの高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で、西壁と南壁から約1m弱の範囲を除いた中央部分が硬化している。壁周溝は、北壁直下から北西隅部までは確認できず、西壁から南壁側には幅10cm前後の狭い幅で確認されている。

ピット 南壁から0.6~0.7m離れて5号堅穴建物南壁に切られる位置で2基確認されている。P1は床面精査で確認され、P2はほとんど切られていたが床下の深さに痕跡が残っていた。いずれも出入り口ピットと思われる。

カマド 5号堅穴建物跡に據されて存在していないが、北西部の床面に崩れた灰褐色粘土ブロックの堆積が見られ、カマドで使用されていた粘土の崩落ブロックと見られる。

覆土 覆土は3層に分かれる。各層とも壁際から順次住居中央部に向かって傾斜して堆積しており、流



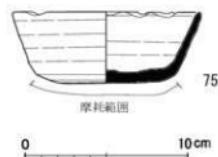
第22図 6号竖穴建物跡
6号竖穴建物跡
1.素面地 T.003/2 ローム粘少量、ローム小ブロック少量、縫りあり、粘性なし。
2.高粘地 T.003/1 ローム粘少量、ローム小ブロック無少量、縫りあり、粘性なし。
3.高粘地 T.003/2 ローム粘少量、縫りあり、粘性なし。
4.中粘地 T.003/3 ローム小・中ブロック多量、縫りあり。

6号竖穴建物跡 P1
1.素面地 T.003/2 ローム粘少量、縫りあり、粘性なし。
2.高粘地 T.003/1 ローム粘少量、ローム小・中ブロック多量、縫りあり、やや粘性あり。

第22図 6号竖穴建物跡

れ込んだ先端は床面を直接覆っている。色調に差があるがロームのブロックの含有は少なく自然堆積土層と考えられる。

遺物 出土遺物は須恵器と土師器であるが、調査の初期に5号竖穴と6号竖穴建物を同時に掘り込んでいるため、覆土から一括で取り上げた破片遺物については5号竖穴建物内で掲載している(第20図)。6号竖穴建物跡に伴うことが確実なのは75の須恵器破片で、南壁寄りの床面付近から出土している。ほぼ完形で、口縁部には小さな欠けが11箇所見られ底部は磨り痕が著しい。口縁部を下にして、坏底部外面を硯の磨り面のように、何らかのものを磨る目的で使用したことが想像される。



第23図 6号竖穴建物跡出土遺物

第8表 6号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法面(m)			観察所見	残存率	胎土	焼成	色調	備考注記
			口縁	通路	器高						
75	S106	須恵器・片	11.6	7.6	4.4	底面部にハケözり、ロクロ右回転、口縁部に欠け11か所、外底面磨り痕著しい。	ほぼ完形	チャート、滑鳞骨針、長石	普通	灰白色：10YR7/1	口縁部に11か所の欠けXai

7号堅穴建物跡（第24・25図、第9表、写真図版4・9）

位置 調査区北西部の調査区ラインを跨ぐ位置にあり、堅穴の西側大部分は調査区外にある。

規模と平面形 南北方向 3.20 m、東西方向 1.22 m以上。

主軸方向 N-87°—E

壁 壁は約30cmの高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 床面はほぼ平坦で、北東隅部の浅い窓み穴の部分を除いて全体的に硬化している。壁周溝は、北東隅部以外で幅が10cm前後で確認されている。堅穴建物跡の掘り方は、土層断面で見ると2層になっており、下層の掘り方は堅穴建物の中心から30cm程南に寄り、段差となっている。掘り方は中央部が深く南北の壁方向に向かって緩やかに浅くなる。

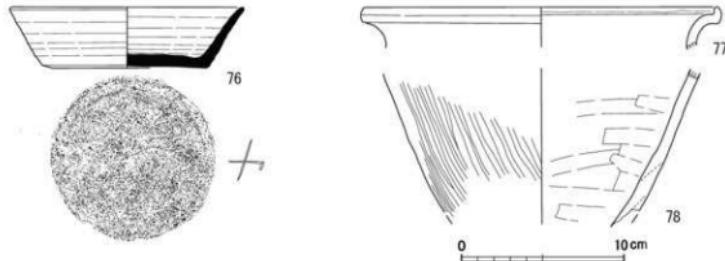
ピット 床面で確認されたP1は、床面の硬化部から外れた位置にあり非常に浅い円形の窓み穴である。

柱穴 というよりは、甕などの容器の設置痕跡の可能性が高い。

カマド 東壁の中央からやや南に寄った位置にあり、カマドの中心から左側の東壁幅を1.0とした場合、右側の東壁幅の比率は0.72である。規模は両袖外側での全幅1.0m、各袖幅は0.30から0.32m、燃焼室の幅は0.45mで袖部にはぶい褐色粘土を使用している。左袖部を構築する粘土のブロック内にはほぼ完形の須恵器坏（76）が埋め込まれている。

覆土 この地点では現代の盛り土層の下に1～4層に分かれる黒褐色土が堆積し、その下の5層上面が遺構確認面で、6～10層が遺構覆土、11・12層が掘り方内充填土層となっている。5層はローム小ブロックや炭化物を含んだ埋め戻し土層と見られる。

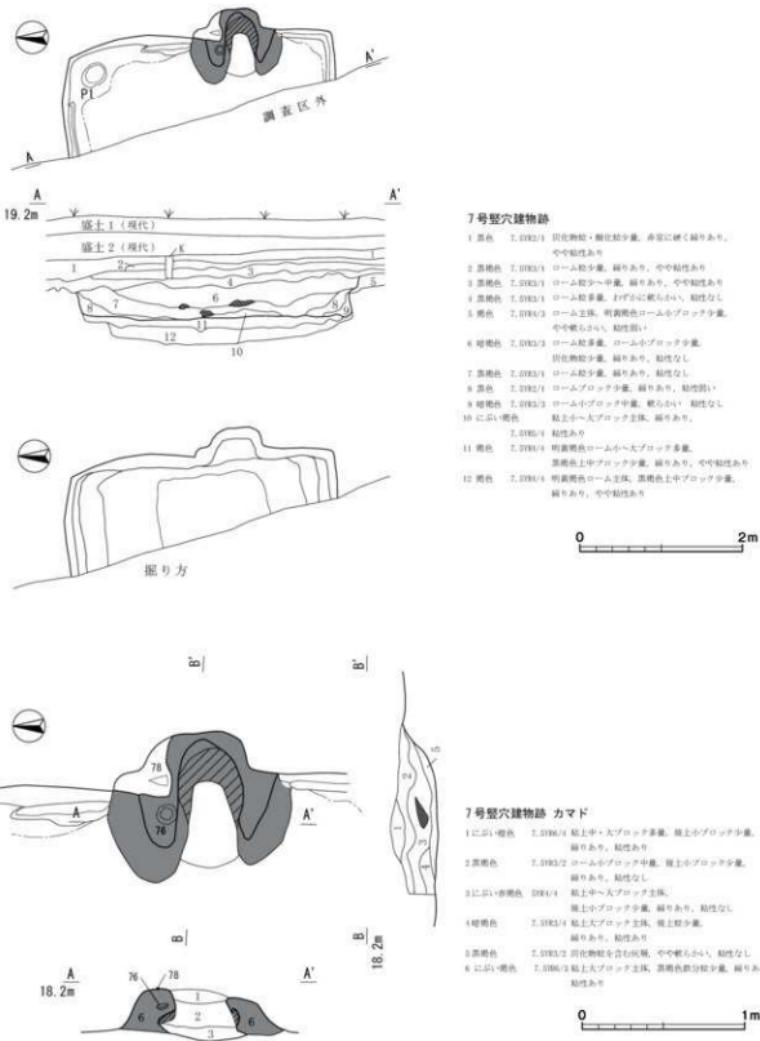
遺物 出土遺物は須恵器と土師器があり、須恵器は坏、土師器は甕がある。77の土師器甕は覆土から、78の甕はカマド覆土から、76の須恵器坏は袖部を構築する粘土内から出土している。



第24図 7号堅穴建物跡出土遺物

第9表 7号堅穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土 位置	種別・記述	法量(cm)			輪郭所見	残存率	粘土	構成	色調	外層 内面	備考記
			口径	底径	厚							
76	S107	須恵器・坏	14.0	10.0	3.8	底部凹凸へラケツリ、中央部一部ナダ。 ヘラ記号「カ」、「十」記号	ほぼ完全	長石、石英、 南緯骨片	良好	にじい褐色：2.596/3 灰黄：2.596/2	No3	
77	S107	土師器・甕	(22.0)	—	—	口縁部擦み上げ	口縁部	長石、石英、雲母	普通	にじい黄褐色：10YR 4/3	1回	
78	S107	土師器・甕	—	—	—	体部外表面へラケツリ、内面ヘラナダ	体下半部	長石、石英、雲母	良好	にじい褐色：2.595/4	No2	



第25図 7号豊穴建物跡

8号竪穴建物跡（第26・27図、第10表、写真図版4・9）

位置 調査区北西部の調査区ラインを跨ぐ位置にあり、竪穴の西側大部分は調査区外にある。

規模と平面形 南北方向3.17m、東西方向0.4m以上。

主軸方向 N-22°-W

壁 壁は約40cmの高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 確認した範囲においては平坦でやや軟質であった。壁周溝は幅が10cm前後、深さ8cm前後で確認されている。竪穴建物跡の掘り方では、全体に深さ15~24cmほどである。

覆土 この地点では現代の盛り土層の下に表土が堆積し、表土直下が遺構確認面で、1~3層が遺構覆土、4~5層が掘り方覆土となっている。遺構覆土は黒褐色土主体の自然堆積土層と見られる。

遺物 出土遺物は土師器の坏底部片が覆土から出土している。

9号竪穴建物跡（第30図、写真図版4）

位置 調査区東部の1号竪穴建物跡の北側の位置にあり、竪穴の大部分は北側の調査区外にある。

規模と平面形 南北方向1.16m以上、東西方向1.74m以上。

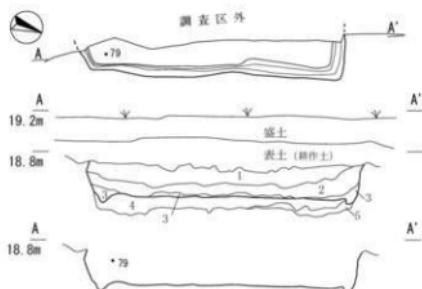
主軸方向 N-9°-W

壁 壁は約56cmの高さまで残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 確認した範囲においては平坦でやや硬化していた。壁周溝は幅が10cm前後、深さ12cm前後で確認されている。竪穴建物跡の掘り方では、全体に深さ15~40cmほどである。

覆土 この地点では現代の盛り土層の下に表土が堆積し、表土直下が遺構確認面で、1~4層が遺構覆土、5~6層が掘り方覆土となっている。遺構覆土は暗褐色土主体であるが、2層はロームブロックを多量に含んだ埋め戻し堆積土層と見られる。

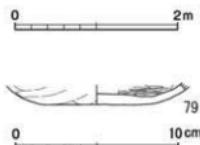
遺物 出土遺物は須恵器の坏が覆土から出土している。



第26図 8号竪穴建物跡

8号竪穴建物跡

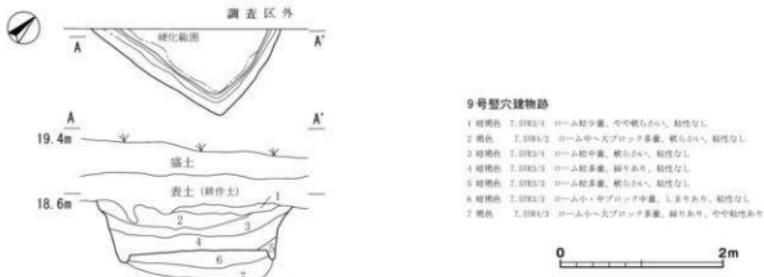
- 1 黒褐色 T.09K3/2 ローム粒多量、ローム小ブロック少量。縦りあり、粘性なし
- 2 黒褐色 T.09K3/1 ローム粒少量、ローム小ブロック少量。縦りあり
- 3 黒褐色 T.09K3/2 ローム粒微少量、ローム小ブロック少量。縦りあり
- 4 暗褐色 T.09K3/3 ローム小~大ブロック多量。縦く縫りあり、中空粘性あり
- 5 黑褐色 T.09K3/4 ローム中ブロック主体。縦く縫りあり、中空粘性あり



第27図 8号竪穴建物跡出土遺物

第10表 8号竪穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法長(cm)		調査所見	生存率	新土	焼成	色調	備考
			口径	底径						
79	S108	土師器・坏	-	6.5	-	底部外面ヘラナゲ、内面くがき	底部片	黄石、石英	良好	にじみ黄褐色: 10YR5/3



第28図 9号竖穴建物跡



第29図 9号竖穴建物跡出土遺物

第11表 9号竖穴建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・基形	法量 (cm)			観察所見	残存率	粒 素	施 成	色 調	備考記
			口径	底径	器高						
80	S109	須惠器・环	(15.6)	—	—	—	口縁部片	瓦石、滑継合剖	良好	灰黄色：2.53E/2	S110一括
81	S109	須惠器・环	—	(7.6)	—	底部内側へラ切り離し無調整、底部へラ記号。ロクロ右側軸	底部片	石英、チャート、滑継合剖	普通	灰オリーブ色：53E/2	S110一括

2 挖立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第30図）

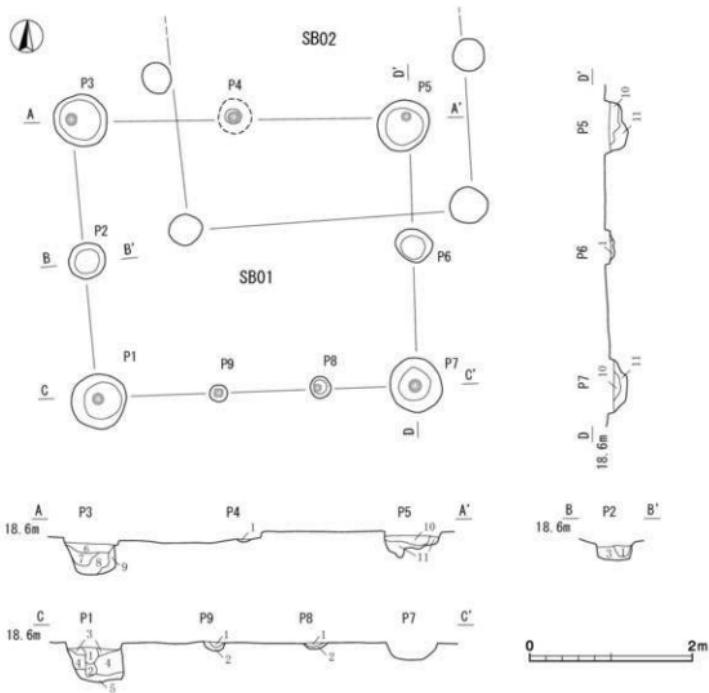
位置と重複関係 調査区西部にあり、2号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模と平面形 南北方向は3.3～3.4 m、東西方向は3.9～4.1 m。東西方向に長い長方形。2×2間の側柱建物で、南面だけ3間である。南北方向の柱間はP2とP6の柱芯位置が不明であるが、掘り方位置からみて等間の1.6～1.7 mと推定できる。東西方向の柱間は南列で西から1.48・1.2・1.2 m、北列で2.0・2.1 mである。面積は13.9 m²。

主軸方向 N-7°-W

柱穴 柱穴は9箇所である。P1・P3・P5・P7が四隅の柱で、直径が0.6～0.69 mと大きく、深さは0.32～0.5 mである。P2・P4・P6は四隅柱の間にある柱穴で、直径はひとまわり小さく0.43～0.46 m、深さは0.11～0.27 mとやや浅い。P8・P9は南面列間にあり、直径は0.2～0.26 m、深さ0.08～0.11 mと小規模な柱穴である。P1は柱穴の据え付け痕が土層断面で明瞭に見られ、柱材の直径は約0.2 mと推定される。その他の柱穴覆土は、土層断面観察から見て抜き取り後の再堆積層のようである。

遺物 遺物は出土していない。



I号掘立柱建物跡

- 1 黒褐色 T.0103.1 ローム粘少量。ローム中プロック少量。やや盛りあり。粘性なし。
- 2 黑褐色 T.0103.1 ローム粘少量。ローム中プロック少量。やや盛りあり。やや粘性あり。
- 3 黑褐色 T.0103.2 ローム粘少量。ローム中プロック多量。盛りあり。粘性なし。
- 4 黑褐色 T.0103.2 ローム粘少量。ローム中プロック多量。盛りあり。粘性なし。
- 5 黑褐色 T.0103.3 ローム粘少量。ローム中プロック少量。盛りあり。やや粘性あり。

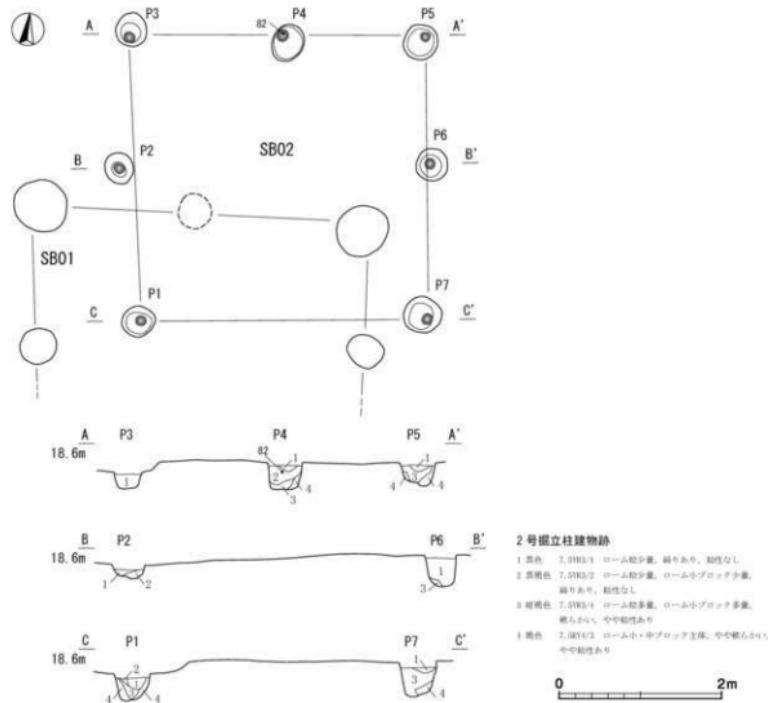
第30図 I号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡（第31・32図、第12表、写真図版4・9）

位置と重複関係 調査区西部にあり、1号掘立柱建物跡と重複関係にある。

規模と平面形 南北方向は3.4～3.5m、東西方向は3.5～3.65m。平面形がほぼ正方形の2×2間の側柱建物である。南面だけは間柱が見られず、1間である。南北方向の柱間は、西面側が南から1.8・1.6m、東面側が1.9・1.6mである。東西方向の柱間は北列が西から1.9・1.75m、南列は3.5mである。面積は12.8 m²。

主軸方向 N—8°—W



第31図 2号掘立柱建物跡



第32図 2号掘立柱建物跡出土遺物

第12表 2号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量(cm)			調査所見	推存率	胎土	焼成	色調	備考
			口径	底径	認高						
82	SB02	須恵器・高台付环	—	9.2	—	—	通認片	長石、陶礫骨釘	普通	黄褐色: 2.5A/1	No.1

柱穴 柱穴は7箇所で各柱穴とも直径が0.39~0.47mで、深さが0.28~0.43mとほぼ同じ規模のものである。P1の土層断面は柱の据え付け位置が推測できるような堆積状況である。その他のビットの柱据え付け位置は底面の観察から柱位置を推定したものである。

遺物 出土遺物は、82の須恵器高台付环の高台部片がP4の柱抜き取り後の堆積土層中から出土している。

3 その他の遺構

1号不明遺構（第33・34図、第13表、写真図版4・9）

位置 調査区南西部にあり、遺構の半分程度は南側の調査区外にあるものと見られる。

規模と平面形 南北方向の幅は1.90m、東西方向の長さは4.72m以上。現状では隅丸長方形と推測される。南北の壁際には間隔をあけてピットが対に配列されている。

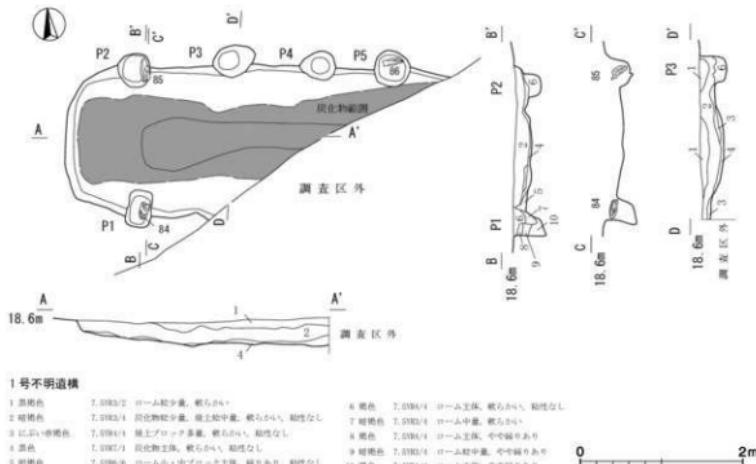
主軸方向 N-84°-W

底面 緩やかな船底状で、長軸方向の西端の壁際と東の最深部の高低差は約15cm、短軸方向南北壁際と中央部の高低差も約15cmである。底面は全体に被熱して焼土化している。

ピット 壁際で確認されたピットは南壁側でP1、北壁側でP2からP5である。P1とP2は対をなし、間隔は1.8m。P2とP3間は1.2m、P3とP4間は1.1m、P4とP5間は0.9mで、P1・P2・P5の覆土には木杭片が残存していた。

覆土 遺構覆土は暗褐色の自然堆積土層と見られる土で埋没しており、その下には底面に沿って厚さ3~4cmで木炭片と炭化物層が堆積している。

遺物 出土遺物は83の陶器の擂鉢が覆土から、84~86の木杭（写真図版9）はそれぞれピットからの出土で、84・86は横になった状態で、85は立った状態で出土している。



第33図 1号不明遺構



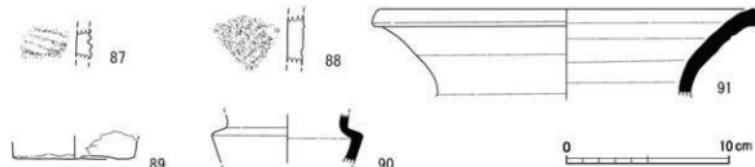
第34図 1号不明遺構出土遺物

第13表 1号不明遺構出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量(cm)			觀察所見	保存率	新土	焼成	色調	備考記
			口径	底径	器高						
83	S001	陶器・縄目	—	—	—	—	体部片	石英	良好	に赤い赤褐色: 2.5YR4/3	S19-1
84	S001	木核1	長さ [32.5]	直径 8.2	重量 775g	自然木の幹を利用し、一方の下端を尖らせる加工を施す。					P1
85	S001	木核2	長さ [26.0]	直径 7.0	重量 575g	自然木の枝を利用し、一方の下端を尖らせる加工を施す。					P2
86	S001	木核3	長さ [26.0]	直径 6.7	重量 575g	自然木の幹を利用し、一方の下端を尖らせる加工を施す。					P3

遺構外出土遺物 (第35図、第14表、写真図版9)

遺構に伴わない遺物として、縄文土器3点、須恵器2点を掲載した。87は縄文土器器体部片は磨滅が激しいが縄文施文の胴部片である。88は単節鉢を施文する縄文時代中期後半の胴部片である。89は縄文土器底部片と思われる。90は須恵器小型短頭壺で8世紀後半頃。91は須恵器甕口縁部で9世紀代のものであろうか。



第35図 遺構外出土遺物

第14表 遺構外出土遺物観察表

番号	出土位置	種別・器形	法量(cm)			觀察所見	保存率	新土	焼成	色調	備考記
			口径	底径	器高						
87	遺構外	縄文土器	—	—	—	単節縄文	体部片	微粉粒多量	普通	に赤い褐色: 7.5YR5/3	S101 4区-1
88	遺構外	縄文土器	—	—	—	単節且縄文	体部片	微粉粒多量	普通	に赤い褐色: 7.5YR6/4	S101 1区-1
89	遺構外	縄文土器・深鉢	(7.6)	—	—	—	底部片	微粉粒	良好	に赤い褐色: 7.5YR6/4	S104-1
90	遺構外	須恵器・小型短頭壺	—	—	—	—	口縁部片	黄灰	普通	暗灰色: 7.5YR5/1	複数
91	遺構外	須恵器・甕	(24.0)	—	—	—	口縁部片	長石・石英	良好	灰褐色: 5G/	S301

V 総 括

本遺跡からは7世紀末～9世紀代の堅穴建物跡9棟と掘立柱建物跡2棟、時期不明な遺構1が確認された。調査面積621m²余りという限られた範囲の調査のため、集落の全体像は見ることはできないが、特徴のある遺構や遺物が見られるので、時期別に全体を眺め総括としたい。

7世紀後半の遺構と遺物

7世紀代の遺構は3号堅穴建物跡1棟だけである。3号は南北方向に長い小型の建物跡で主柱穴も出入りロビットもない。カマド本体は壁をほとんど掘り込みず、屋内におけるカマドの占有率が大きい建物跡である。

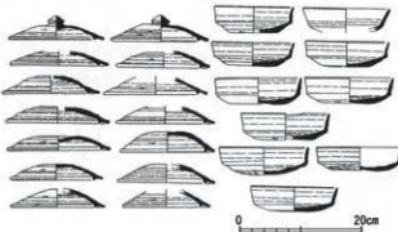
この3号堅穴建物跡からは、特徴のある須恵器（第15図44）が出土している。本遺跡では、この1例しかないので、器形は古墳時代の合子形環蓋に似ているが、天井部としては余りに平坦な仕上げであるため無台の环と考えられる。本遺跡が所在する水戸市内には木葉下窯跡群があり、本遺跡内から出土する須恵器の多くは同窯跡群のものと考えられる。須恵器44も胎土中に海綿骨針、チャート織を含んでいて、木葉下窯跡群の胎土の特徴と一致するが、現状ではこの形状のものは同窯跡から見つかっていない。ただし、消費遺跡である台廻廃寺跡（第26次）T4-005号遺構出土3の环や、同T5-001号遺構出土の15の环等に、小振りだが類似した形態・

技法で同時期の环が見られる。近隣では、本遺跡から約40km離れた新治窯跡群（土浦市北部からつくば市）があり、本遺跡でもこことの製品が数点見つかっている。新治窯跡群の製品には胎土に雲母が含まれるのだが、本例には入っていないので同窯跡群産には該当しない。そこで、隣県の窯跡資料を探ると、この环の形状に最も類似し、しかも胎土に海綿骨針を含む製品が福島県相馬市の善光寺2B号窯出土品にある

（第36図）。善光寺2B号窯の製品は、口径がやや大きなかえり蓋を伴っており、これに組み合う無台环身として生産されていると考えられている。本遺跡の須恵器44が善光寺窯の製品であれば、約200kmの距離を運ばれたことになる。現時点では水戸市木葉下窯跡群内の未確認の窯跡か、福島県相馬市善光寺窯跡の製品である可能性が考えられるとしておきたい。

8世紀代の遺構と遺物

8世紀代の遺物を出土している6・7・8号堅穴建物はいずれもやや小型な建物である。6号堅穴建物から出土している須恵器环（第23図75）は二次底部面を持つ底部回転ヘラケズリの环で、木葉下産須恵器环A分類の2類（佐々木1995）で8世紀第2～3四半期のものと見られる。7号堅穴建物では、カマド袖部構築粘土中に8世紀前葉の完形の須恵器环（第24図76）が埋め込まれていたため、その頃に造られたと考えられる。8号堅穴建物は8世紀前半に多い底部ヘラケズリの土師器环が覆土から出



第36図 善光寺2B窯跡出土遺物

土していることや主軸方向が6号竪穴の主軸方向に近いことなどから、8世紀前半代に機能していたものと考えられる。

9世紀代の遺構と遺物

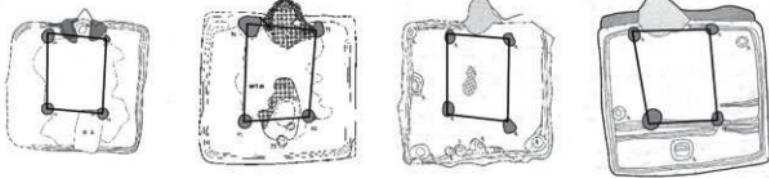
8世紀代に造られ、その後上屋の建て替えを行い、廃絶の時期は9世紀代になると思われるものが大型の1号竪穴建物跡である。出土遺物は8世紀第4四半期頃のものから9世紀第3四半期のものがある。最も新しい時期の遺物は、P7覆土から出土している須恵器片（第8図2）や南西部の覆土から出土している須恵器坏（同3）が9世紀の中頃のもので、カマド内や床から破片で出土している新治産の須恵器鉢（鉢）（第9図16）は小高村内段階から東城寺寄居前B段階（赤井1997）の9世紀前半頃、土師器甕類も9世紀前半頃を主体としている。よって、竪穴の廃絶の時期は9世紀中頃と考えられる。9世紀第3四半期頃の土師器甕が少量あるが、これらは埋没途上の廃棄遺物と思われる。

1号竪穴建物跡の時期と構造の関係にもふれておく。1号では、竪穴の平面相似形に並ぶ4本柱主柱穴配置から、4本中2本がカマド両脇の壁柱穴となる4本柱主柱穴への変遷が推定できる。まず、竪穴の平面相似形に並ぶ段階で柱の据え替えが確認でき、上屋の造り直しがあったものと見られる。またそれに対応するように、出入り口は8世紀第4四半期頃の須恵器坏（第8図1）を伴うP6からP1に造り替えられている。このことから、初期の1号竪穴建物は8世紀後半～後葉頃に竪穴の相似形に位置する4本柱主柱穴で、P6の出入り口ピットを伴う大型竪穴建物跡として機能し、一度上屋の造り直しをしていた。次の段階の主柱穴配置を推測すると、北壁のカマド両脇壁際に主柱穴と見ても遜色ない大きさのP7とP8がある。P7の覆土からは9世紀中頃の須恵器坏（第8図2）が出土しており、最も新しい段階の柱穴になると見られる。もしP7・8が主柱穴であるなら、2本がカマド両脇の壁柱穴となる4本柱主柱穴構造の竪穴建物跡で、P1が出入り口ピットとなる。この構造の竪穴建物跡は茨城県内に、つくば市中原遺跡327号、笠間市塙谷遺跡85号、水戸市梶内遺跡70・85号などの類例があり（第37図）、出土遺物は9世紀前半代から中頃のものが多い。このことから、2本がカマド両脇の壁柱穴構造の竪穴建物跡は9世紀前半代から中頃の大型竪穴建物跡に見られる特徴であると予察しておきたい。

9世紀代のその他の竪穴建物跡は2・4・5号である。いずれも小型で主柱穴がないが、この時代では主流の竪穴建物と考えられる。

2号竪穴建物跡の遺物は、古いものでは須恵器盤（第11図26）や蓋（同27）の破片で8世紀代、他

④



第37図 カマド両脇の壁柱穴と組み合う4本柱主柱穴構造の竪穴建物例

の須恵器の壺・土師器の甕などは9世紀前半代のものが主体で、体部から口縁部にかけてあまり屈曲せずに立ち上がる須恵器の甕は9世紀中葉～後半頃のものと思われる。土器の出土状況からみて、2号は9世紀前半代の竪穴建物跡と考えられる。2号竪穴建物跡のカマドでは立てられた状態の土製支脚が原位置のまま出土している。土製支脚の底面は全体に弱還元状態であるが、熱を受けた方向と見られる側面の2分の1強が酸化焰色である。このことから、土製支脚は下部を穴に埋め込んでいるわけではないものの、常に一定方向からの火を受けていたものと考えられる。おそらく土製支脚はカマドに埋め込まれたカマド甕と一緒になる構造で、カマド天井部を支える構造材としての役割も併せもち、固定した状態で使用されたと見てよいと思われる。2号以外の8～9世紀の竪穴建物でも、カマド燃焼室内の堆積灰層の上面には、土製支脚設置痕と推定できる浅い窪みが確認できる例がある。本報告では、そのことについても注目して図中に示している（1・4・5号竪穴建物跡カマド）。

4号竪穴建物跡の遺物は、土師器の甕（第17図55）が9世紀前半代、須恵器の壺（同50）・盤（同52）は残存率は悪いが9世紀の第3四半期頃のものである。4号は9世紀前半から中葉頃に機能していたと見られる。5号竪穴建物跡の出土遺物については、重複する6号竪穴建物跡に由来する8世紀代の遺物を除いて、残存率がよい須恵器壺（第21図60）が新治産の9世紀第3四半期頃の遺物と見られる。

掘立柱建物跡2棟も9世紀代の建物である。2号掘立柱建物跡の掘り方内から出土している須恵器高台付壺の時期が、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期であり、土層の堆積状況から見て構築時の掘り方内混入ではなく柱材抜き取り後の流れ込みと見られるが、どちらの場合でも9世紀第1四半期以降に廃絶したものと考えられる。1号掘立柱建物跡は遺物の出土がなく、重複する2号との前後関係は不明だが、1・2号とも主軸方向がほぼ揃っていることや、4・5号竪穴建物跡の主軸方向と近い事を考え合わせると、9世紀前半代に1・2号掘立柱建物跡は機能していたものと考えられる。

2棟の掘立柱建物跡は東・西・北面に間柱をもち、壁や屋根構造を支える 2×2 間の建物跡であるが、1号は南側の間柱だけが極端に細い3間であり、2号では南側の間柱がない構造である。どちらの建物



第38図 草堂の図
『粉河寺縁起繪巻』の一部をトレイス)

も南面を開放するような構造だとすれば、南面を正面として簡易な扉を設けるような施設ではないかと思われる。たとえば小さな草堂建物（第38図）のようなものが連想される。同時期の5号堅穴建物跡からは「宮」の墨書き文字が出土しており、掘立柱建物跡との関係が注目される。

参考・引用文献

- 赤井博之 1997 「律令制変質期の須恵器の系譜」『東国の須恵器』古代生産史研究会
- 伊東重敏 1976 『大六天古墳（森戸古墳群第12号墳）』茨城県東茨城郡常陸村教育委員会
- 井上義安 1985 『水戸市下畠遺跡 市道酒門8号線幅拡工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
1994 『水戸市大串遺跡 市道常港8-185号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
1998 『伊豆屋敷跡確認調査報告書 墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸地方埋蔵文化財研究会
- 井上義安・金子浩正 1996 『水戸市大串遺跡 常澄中学校増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市北屋敷古墳 市道常港7-0057号線埋蔵文化財発掘調査報告書』茨城県水戸市
- 小川和博・大瀬淳志・川口武彦・木本羊周・渥美賀吾・岡口慶久・株式会社京都科学 2009 『大串遺跡（第7地点）一介護老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 柳村宜行 1995 『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書II 桩内遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告第100集 財團法人茨城県教育財團
- 堀山雅彦 1993 『一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書I 中ノ割遺跡・小山遺跡・諫訪前遺跡・高原古墳群・沢橋遺跡・高原遺跡・北星遺跡』財團法人茨城県教育財團
- 川口武彦 2005 『水戸市下野丘町出土の神子梨型尖頭器』『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
2008 『水戸市下野丘町出土の神子梨型尖頭器』『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦・色川順子・渥美賀吾・片平雅俊 2008 『元石川大谷原遺跡一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・元石川大谷原遺跡発掘調査会
- 川口武彦・小川和博・大瀬淳志 2009 『水戸市元石川町所在 小仲根遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 合田芳正 1998 『古代の鍵』考古学ライブラリー 66 ニューサイエンス社
- 佐々木義則 1995 『木葉下黨群須恵器有台杯・有台杯蓋・有台盤の編年』『婆良岐考古』第17号 婆良岐考古同人会
- 佐々木義則 2013 『木葉下黨群須恵器有台杯・有台杯蓋・有台盤の編年』『婆良岐考古』第35号 婆良岐考古同人会
- 鈴木敏則 2000 『西湖裏 古墳時代』『須恵器生産の出現から消滅 第2分冊 生産地図』東海土器研究会
- 高橋清文 2011 『塙谷遺跡2』笠間市教育委員会
- 東京国立博物館 1980 『東京国立博物館出版目録（古墳・関東篇1）』
- 中山信名 1979 『新編常陸國誌』宮崎謙思会
- 白田正子 2001 『中原遺跡3』茨城県教育財團文化財調査報告第170集 財團法人茨城県教育財團
- 日沖剛史・石丸 敦・川口武彦・色川順子・新垣清貴・渥美賀吾 2008 『薄内遺跡（第1地点） 移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 常陸古代窯業史研究会 1998 『水戸市山田黨群群確認調査報告』『茨城県考古学協会誌』第10号
- 水戸市教育委員会 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書（平成10年度版）』
- 水戸市教育委員会 2007 『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』
- 水戸市教育委員会 2010 『水戸の指定文化財』
- 南田法正・山本千春・土井道昭・渥美賀吾 2009 『町付遺跡（第1地点） 集合住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 谷村俊雄 2014 『宮部遺跡』石岡市教育委員会
- 吉川明宏 1991 『常澄村森戸出土の人物埴輪片』『年報』10 財團法人茨城県教育財團

第15表 遺物集計表

遺構名	区	縄文	古 代								中世			近世			近代			土 製 品	石 製 品	金 属 製 品	木 製 品	炭 化 物	不 明	小 計			総 数	総 重 量 (g)														
			土師器				須恵器				土 師 器			須 淚 器			陶 器																											
			深 鉢	环	甕	壺	环	蓋	盤	壺	環 鉢	瓶	壺	環 鉢	瓶	壺	環 鉢	瓶	壺																									
SI01	1区	1	29		2		1		12																																			
	2区		46	5	3	3	1	1	1																																			
	3区			1	2																																							
	4区	1	74	1	26		2			1																																		
カマド			22	4	1																																							
柱穴		3			1																																							
一括	2	102		15	13	1		3																																				
SI02	1区		13	7																																								
	2区	3	1	26	5	1	3			1	6																																	
	3区	4	1	47	12	3	4	1	1	3	1																																	
	4区	1	1	26	13	1				2	1																																	
カマド			4	2	2	1			1	4																																		
一括		15	2		1		1																																					
SI03	2区		2																																									
	3区		1																																									
カマド		12	4	1																																								
一括		13																																										
SI04	1区		13	2																																								
	2区		8	1	6						1																																	
	3区		14	2						1																																		
	4区	2	21	1		1		1																																				
カマド		1	16	4		1	1	1																																				
一括	1	21	2	1																																								
SI05	1区		19	7						1																																		
	2区		10		2	3																																						
	3区		3			2	1																																					
カマド		1	11	3	4	3			2	1																																		
一括		1																																										
SI06	2区		10																																									
	3区		3							1																																		
	4区	9																																										
SI06	3区																																											
SI07	1区	1	10	1																																								
	2区		8																																									
カマド		3	1	1	1																																							
SI08		1	13																																									
SI09		14		9	2																																							
田SI09		9		1		1																																						
SX01		—																																										
SB01		4																																										
SB02		5			1																																							
表抜		6	2	23	9	2	1	2	3																																			
合 計		6	19	6	682	19	138	23	26	2	15	5	6	2	28	8	6	1	1	48	1	2	2	9	3	17	4	1001	80	1081	18325													

出土遺物一覧表凡例

・出土遺物を遺構及び遺構内地点別、器種別に数えた。

・土器は、図上で器体の直径が復元できたものは個体、できないものは破片として数えている。

・表内の空欄は該当がないことを示している。

写 真 図 版



調査区全景（南西から）



1号堅穴建物跡（南から）



1号堅穴建物跡北西部覆土堆積状況（南から）



1号堅穴建物跡カマド（南から）



1号堅穴建物跡カマド左袖断割状況（南から）

写真図版 2



1号竖穴建物跡遺物出土状況（北西から）



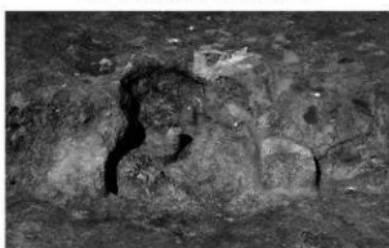
1号竖穴建物跡鉄製品出土状況（北西から）



1号竖穴建物跡掘り方（南東から）



2号竖穴建物跡（南から）



2号竖穴建物跡カマド（南から）



3号竖穴建物跡（西から）



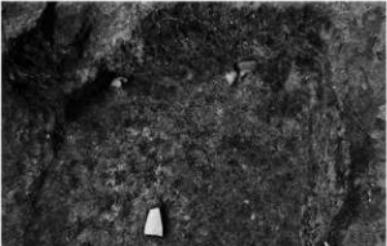
3号竖穴建物跡カマド遺物出土状況（西から）



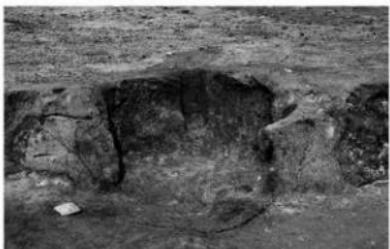
3号竖穴建物跡須恵器坏出土状況（南から）



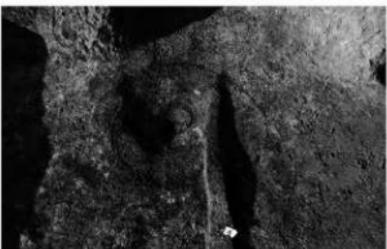
4号竪穴建物跡（南から）



4号竪穴建物跡遺物出土状況（南から）



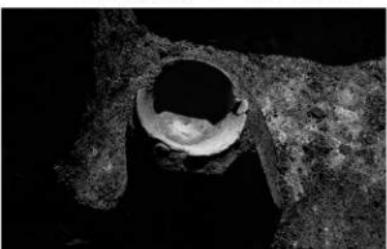
4号竪穴建物跡カマド袖部断ち割り状況（南から）



4号竪穴建物跡古いカマド火床（南から）



5・6号竪穴建物跡（南から）



5号竪穴建物跡遺物出土状況（北から）



5・6号竪穴建物跡遺物出土状況（西から）



6号竪穴建物跡遺物出土状況（北から）

写真図版 4



7号竪穴建物跡（東から）



7号竪穴カマド遺物出土状況（西から）



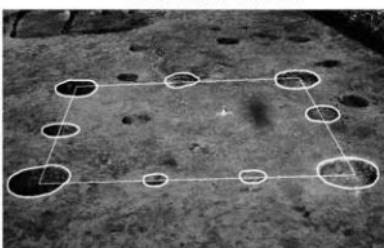
7号竪穴カマド袖断ち割り状況（西から）



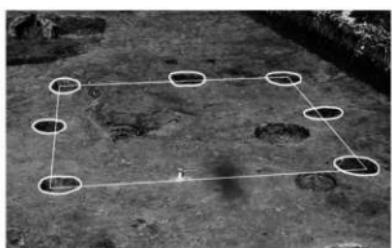
8号竪穴建物跡（東から）



9号竪穴建物跡（西から）



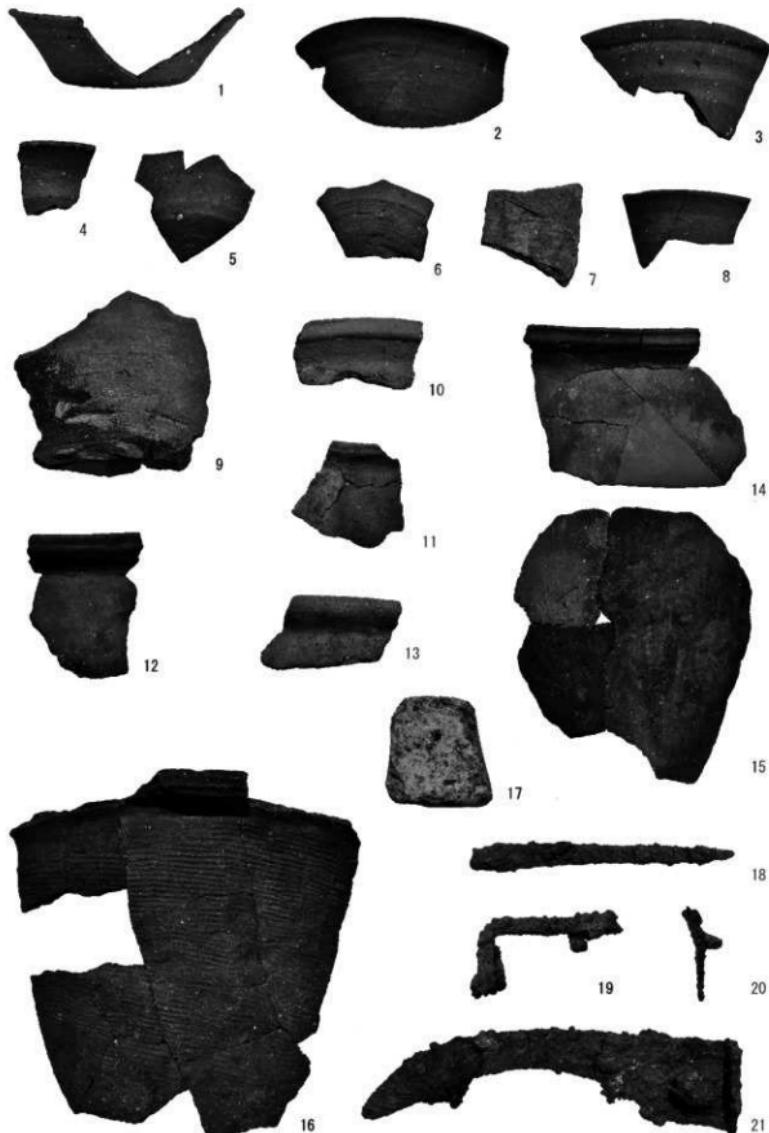
1号掘立柱建物跡（南から）



2号掘立柱建物跡（南から）

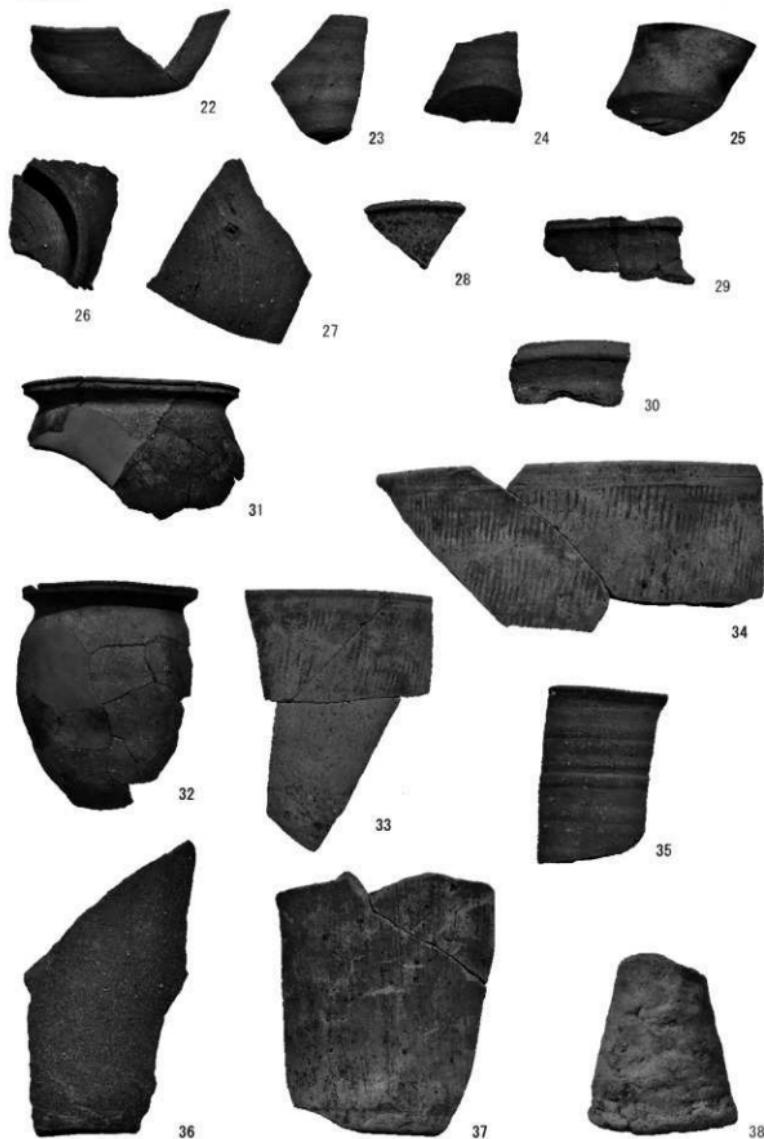


1号不明遺構（西から）

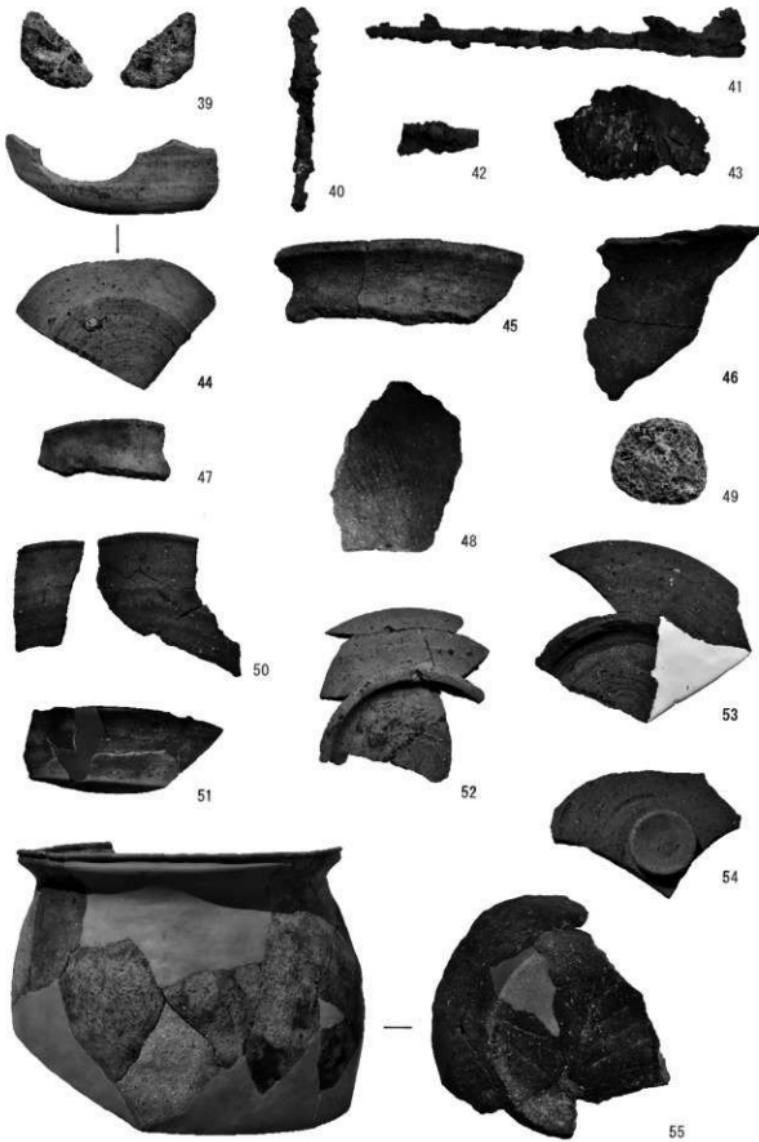


1号堅穴建物跡出土遺物 1-21

写真図版 6



2号竪穴建物跡出土遺物 22-38

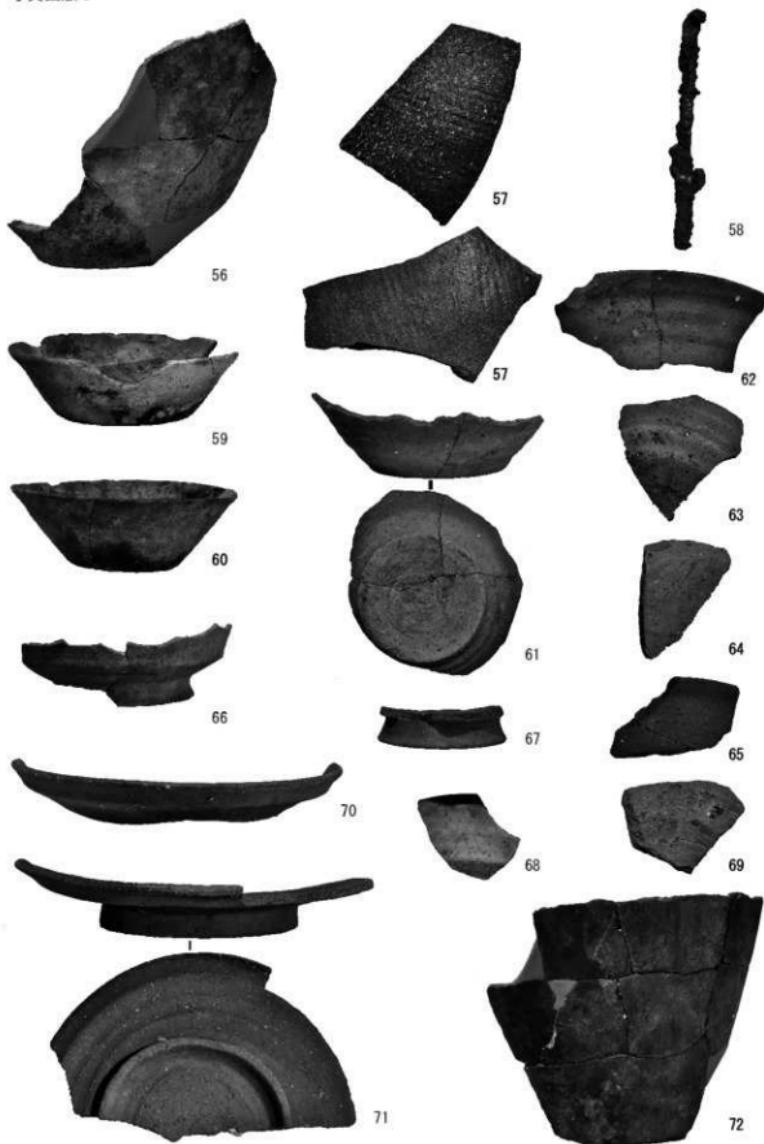


2号堅穴建物跡出土遺物 39~43

3号堅穴建物跡出土遺物 44~49

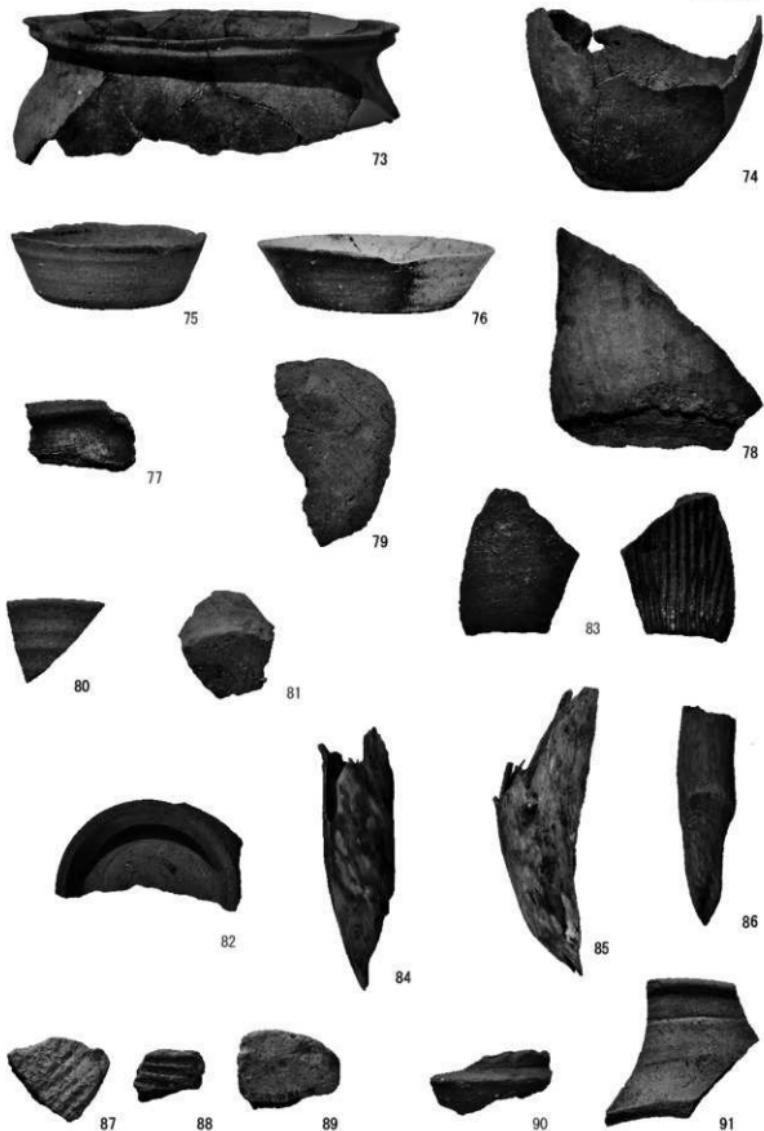
4号堅穴建物跡出土遺物 50~55

写真図版 8



4号堅穴建物跡出土遺物 56-58

5号堅穴建物跡出土遺物 59-72



5・6・7・8・9号竪穴建物跡出土遺物 73-81 2号掘立柱建物跡出土遺物 82

1号不明造構出土遺物 83, 84-86(縮尺1/4) 造構外出土遺物 87-91

報告書抄録

ふりがな	こはらいせき だいさんちてん								
書名	小原遺跡 第3地点								
副書名	都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第68集								
編集者名	賀来孝代								
著者名	太田有里乃, 染井千佳, 土生朗治								
編集機関	水戸市教育委員会事務局 文化課埋蔵文化財センター, 有限会社 毛野考古学研究所 茨城支所								
所在地	茨城県水戸市塙崎町 1064-1, 茨城県常総市菅生町 2042-1								
発行年月日	平成27年3月31日								
所取遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
小原遺跡	水戸市東前町 1056～1065番地外 (7-6-1 東前原線)	08201	183	36° 20' 14"	140° 31' 37"	2015.1.26 ～ 2015.2.27	621.25 m ²	道路改良及び 流域関連下水 道工事	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項		
小原遺跡	集 落 跡	奈良平安	堅穴建物跡 9 掘立柱建物跡 2			土師器 須恵器 土製品 鉄製品	奈良・平安時代の集落跡 で、平安時代に小型の掘立柱建物跡が伴っている。 ケルル鉤とみられる破断片が出士している。		
		その他	不明遺構 1				陶磁器 木杭		

茨城県水戸市

小原遺跡（第3地点）

都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷 平成27年3月30日

発行 平成27年3月31日

編集 有限会社毛野考古学研究所
〒303-0044 茨城県常総市菅生町2042番地1
TEL 0297(27)0722

発行 水戸市教育委員会
〒311-1114 茨城県水戸市塙崎町1064番地1
TEL 029(269)5090

印刷 朝日印刷工業株式会社
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地
TEL 027(251)1212